令和３年度
第18回　東京都高等学校体育連盟
研究大会 紀要

期日　令和４年２月19日(土)
会場　東京都教職員研修センター
主催　東京都高等学校体育連盟
後援　東京都教育委員会

主管　東京都高等学校体育連盟研究部
東京都高体連ホームページ
http://www.tokyo-kotairen.gr.jp

令和３年度　第18回　東京都高等学校体育連盟　研究大会

表紙　デザイン協力

東京都立日本橋高等学校　３年　藤代　菜乃　さん

令和３年度

第 18 回 東京都高等学校体育連盟研究大会

◇ 令和４年２月 19 日（土）　於 東京都研修センター　111 号室
14 時 00 分 ～ 16 時 40 分　（13 時 30 分 受付開始）

【 講演 】「体罰根絶に向けた指導法」～ペップトーク～

講師　堀（ほり）　寿次（としつぐ）　（日本ペップトーク普及協会）

【プロフィール】
大分県出身　東京都北区在住
菅公学生服株式会社にて、制服・体育着メーカーの営業として活動。
学校の生徒、先生、保護者様に何ができるかを提供し続け、ペップトークに出会う。
授業や部活でペップトークが広がるように、関東エリアを中心に講演中。

【主な経歴】
2007 年　大阪府立大学経済学部　卒業
2007 年　尾崎商事株式会社(のち菅公学生服株式会社に社名変更)
開発本部にて商品企画を担当
2013 年　菅公学生服株式会社　関東スポーツ営業部
学校専属営業：担当エリア　神奈川県・東京都

【その他講演・セミナー実績】
中学校・高校での【制服着こなしセミナー：60 分程度の講演会】
アンガーマネジメント　ファシリテーター【怒りのコントロールの基礎】など

【全国高体連研究大会　報告】
＜競技力向上＞　阿部　一臣(都立 高 島 高等学校　ソフトテニス女子専門部)
＜健康と安全＞　田中　康之(都立 立 川 高等学校　サッカー専門部)
＜部活動の活性化＞　柳澤　左門(都立 日本橋高等学校　ボート　専門部)
＜課題研究＞　鞠子　智秋(都立 清 瀬 高等学校　サッカー専門部)

【特別総評】
「～東京都のこれまでとこれから～」　前全国高体連活性化委員会委員長
筑波大学付属高等学校　中塚　義実

【情報収集】「～コロナ禍の部活動　工夫と変化の調査～」堀越　和彦
（日 本 学 園 高等学校　自転車競技　　専門部）

主　　催	東京都高等学校体育連盟
後　　援	東京都教育委員会
主　　管	東京都高等学校体育連盟研究部　http://www.tokyo-kotairen.gr.jp
参 加 者	東京都高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者 東京都高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生

参加申込先　〒186-0004　東京都国立市中 3-1-10　桐朋高等学校内　森政憲　宛
TEL　042-577-2171　FAX 042 - 574 - 9898　（専門部一括・個人申込共）
各専門部に所属されている先生方は、専門部研究部から申し込み、ご連絡ください。

目　次

あいさつ

東京都高等学校体育連盟会長　　奥秋　將史　1

大会役員　2

開催要項　3

講演

「体罰根絶に向けた指導法」～ペップトーク～

日本ペップトーク普及協会　堀　寿次　5

研究発表

東京都高体連研究部の活性化のために

－高体連研究部との 20 年のかかわりの「記録」と「思い」－

全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 前委員長　中塚　義実　13

調査報告

コロナ禍の部活動　～工夫と変化の調査：１年後の実態～

東京都高等学校体育連盟研究部　第２分科会チーフ　日本学園高等学校　堀越　和彦　31

研究部　規約　39

研究部　組織と名簿　38

研究部　調査用紙　39

「令和３年度　第５６回全国高等学校体育連盟　研究大会紀要」（抜粋）　43

運動部活動改革

東京都高等学校体育連盟
会　長　奥秋　將史

新型コロナウィルス感染症のオミクロン株の急激な感染拡大の影響により、東京都高等学校体育連盟の本部役員及び研究部員は令和４年１月１３日・１４日に青森県で実施された全国高等学校体育連盟主催の研究大会に急遽、不参加となりました。また令和３年度、同日に実施する予定の優秀校・優秀選手の表彰式及び第１８回東京都高等学校体育連盟研究大会は、会場を新たに東京都教職員研修センター内で実施を予定していましたが、オミクロン株の急激な感染拡大によるまん延防止措置期間も設定される警戒レベルとなり、やむなく中止せざる負えなくなりました。今年も研究部を中心に各競技専門部の皆様のご協力と関係者の方々のご支援をいただいて東京都の研究活動に取り組まれました。

本連盟は、「競技力向上」と「研究」を両輪と捉えて活動しています。この研究大会は、東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育・スポーツ指導者の資質向上を図ることを目的としています。

今年度も、「競技力向上」「健康と安全」「部活動の活性化」の３分科会からそれぞれのテーマについて発表が行われる形式となっています。これらの研究発表などは高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興発展に資するものとなっていくためにも可能な方法で東京都に還元したいと思います。

さて、昨年の夏、令和３年度全国高等学校総合体育大会「輝け君の汗と涙　北信越総体　２０２１」が、福井・新潟・富山・石川・長野・和歌山６県のご協力のもとに２年ぶりに開催される運びとなりました。一昨年の夏季インターハイにおいては史上初の中止を余儀なくされ、日本中の高校生アスリートが悔しい思いからの復活開催となりました。

一方では、スポーツ庁が運動部活動の地域移行に関する検討会議を進める中で、地域運動部活動の推進事業として令和５年以降に「休日の部活動の段階的な地域移行」に向けて、様々な課題に総合的に取り組むために、全国各地の拠点校において実践研究を実施して研究成果を普及することで中学校のなどの全国展開につなげる取り組みが始まるとされています。また「合理的で効率的な部活動」、「生徒にとって望ましい大会の推進」などの取り組みが挙げられています。高体連が取り組むべき課題には体罰根絶、危機管理における健康や安全指導など課題山積ではありますが「運動部活動の改革」は今後最も大きく重要な課題として、研究活動においても取り上げていく必要があると考えています。皆様のご理解とご協力のもとに取り組んでまいりたいと思います。

結びに、本研究大会の開催に向けご尽力いただきました研究部を始め関係専門部の皆様や、ご支援いただきました多くの関係者の方々に深く感謝申し上げご挨拶とさせていただきます。

令和３年度　第１８回東京都高等学校体育連盟研究大会 役員

会長	奥秋　將史				
副会長	畑澤　正一	浅見　浩一郎	平池　徳見	高野　学	池戸　成記
	宮川　努	小宮　徳健			
参与	鴻野　誠	高野　幸代	高取　克明	山田　智美	渡辺　洋司
	栗原　信一郎	田中　康之	松ノ井　覚	馬場　智生	松谷　茂
	各専門部部長				
委員長	高野　学				
副委員長	田中　康之	鞠子　智秋			
委員	塩田　伸隆	中塚　義実	堀越 和彦	柳澤　左門	奥　正克
	青木　茉奈美	征矢　範子	阿部 一臣	眞鍋　健治	秋月　隼
	新井　理仁	松里　亮	藤岡　純也	森　政憲	
	各専門部代表研究部委員				

運　営　役　員

総務	田中　康之		
総務員	阿部　一臣	森　政憲	
渉外・接待	東京都高体連事務局	鞠子　智秋	
会場(来賓席確保)	眞鍋　健治	堀越　和彦	
会計	新井　理仁	秋月　隼	
紀要	柳澤　左門	塩田　伸隆	
表紙	都立日本橋高等学校		
記録(写真)	阿部　一臣	眞鍋　健治	
記録(録画)	新井　理仁	眞鍋　健治	
（録音ﾃｰﾌﾟ起し）	鞠子　智秋	森　政憲	
受付	新井　理仁	青木　茉奈美	征矢 範子
司会者	小宮　徳健		
報告・講演	全国研究大会報告	第一分科会	阿部　一臣
		第二分科会	田中　康之
		第三分科会	柳澤　左門
		課題研究	鞠子　智秋
	特別講演		中塚　義実
	コロナ禍の情報収集		堀越　和彦

令和３年度

第 18 回東京都高等学校体育連盟研究大会

開　催　要　項

１　趣　　旨　　東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るために日ごろの研究、指導の成果を発表するとともに高体連の直面する諸問題について情報交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興発展に資する。

２　主　　催　　東京都高等学校体育連盟

３　後　　援　　東京都教育委員会

４　主　　管　　東京都高等学校体育連盟研究部

５　期　　日　　令和4年2月１９日（土）　14時00分 ～ 16時40分

６　会　　場　　東京都教職員研修センター　111 号室
〒113-0033　東京都文京区本郷１丁目3-3
JR 総武線「水道橋」東口徒歩３分
東京メトロ丸ノ内線・南北線「後楽園」徒歩８分
都営三田線「水道橋」　A１出口　徒歩２分
都営三田線・大江戸線「春日」　徒歩８分

７　参 加 者　　東京都高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
東京都高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生

８　内　　容　（1）全国高体連研究大会　３分科会からの報告
（2）講　演　「ペップトークに関する講演」・ワークショップ〈ペップトーク協会専務理事〉
（3）東京都のこれまでとこれから　　前全国高体連研究部活性化委員長より
（4）コロナ禍の情報収集

※各発表テーマ・講演内容は、http://www.tokyo-kotairen.gr.jp に掲載します。

９　時　　程

受付　13 時30 分～14 時00 分
14 時00 分　開会式
14 時10 分　全国研究大会　報告　各分科会　　各５分
14 時30 分　講演「体罰根絶に向けた指導法～ペップトーク～」・ワークショップ　　75 分
15 時45 分　――休憩　10 分――　　10 分
15 時55 分　東京都のこれまでとこれから　　前全国高体連活性化委員会委員長　中塚　義実　　25 分
16 時20 分　コロナ禍の情報収集　　10 分
16 時30 分　閉会式

10　参加申込み
参加申し込みは、所定の用紙に必要事項を記入の上、各専門部で一括して申し込む。
個人の申し込みは、下記申込先に直接連絡する。
申込先　〒186-0004　東京都国立市中3-1-10　　桐朋高等学校内　森　政憲　　宛
TEL　042-577-2171　　FAX 042-574-9898

申込期限　　**令和４年１月 18 日（火）必着**

【講演】

「体罰根絶に向けた指導法」～ペップトーク～

日本ペップトーク普及協会　堀　寿次

1.ペップトークとは

まずはじめに、ペップトークとは何か（定義）、何のために行うか（目的）
そして、どんな特徴があるのかをつかんでいきましょう！

point 1 定義

ペップトークとは、PEP TALK.英語の辞書に書いている英単語です。
Pepは『元気・活気』という意味があり、pep upで『～を元気づける』です。
PEP TALKは意味は、『（短い）激励演説・応援演説』

もともとスポーツの試合の直前に行われている
激励のショートスピーチで、監督が選手から
最高のプレーを引き出すために考え抜いた言葉がけです。

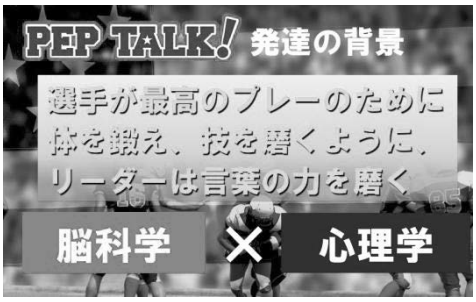
みなさんもスポーツ映画やドラマで監督が選手
を励ましているシーンを見たことがあるかもしれません。
2019年ラグビーワールドカップ日本大会で
ジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチは
1次リーグ世界ランキング1位アイルランド戦を前に、
こう選手たちを鼓舞しました。

「誰も勝つと思ってないし、誰も接戦になるとも思ってない。誰も僕らがどれだけ
のものを犠牲にしてきたか知らない。勝利を信じているのは僕たちだけ」

この言葉で心に火がついた選手たちは見事勝利を勝ち取ったのです。
みなさまが仕事や家庭でのコミュニケーションを円滑に行うためにそのエッセンス
を理解し、実践できるようにしていきます。

point 2 目的

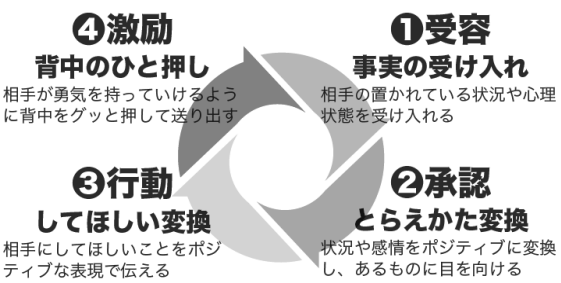
アメリカのスポーツビジネスで磨かれた技術である
ペップトークの目的は、選手の『本領発揮』を導くこと
です。そのためには、単に気合や根性ではなく、脳科学
や心理学の背景を持ち、どんな言葉をどのように伝える
かで、人のやる気を引き出し行動を変えることが分かっ
ています。ペップトークの背景にある脳科学・心理学
を知ることは、言葉磨きの上で大切な要素です。



point 3 特徴

ペップトークの特徴は
『短く・わかりやすく・肯定的な・魂を揺さぶる』
激励のスピーチです。
そのために4つステップがあります。

❶受容（事実の受け入れ）
❷承認（とらえかた変換）
❸行動（してほしい変換）
❹激励（背中のひと押し）

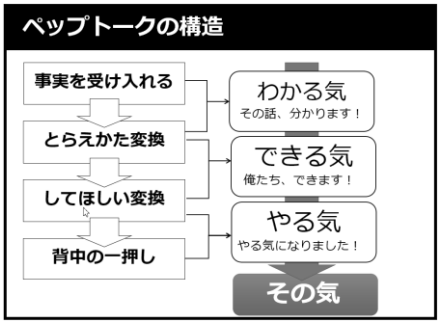


Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

2.ペップトークの4ステップ

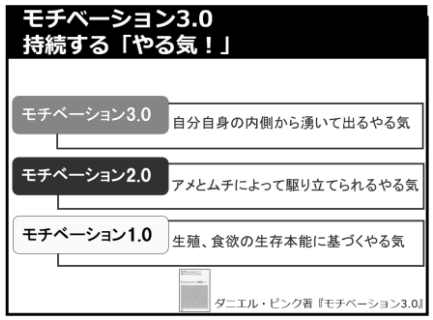
ペップトークの4つのステップにはどのような効果があるのか？
それを読み解き、自分の伝え方を振り返ってみよう！

point 1 構造

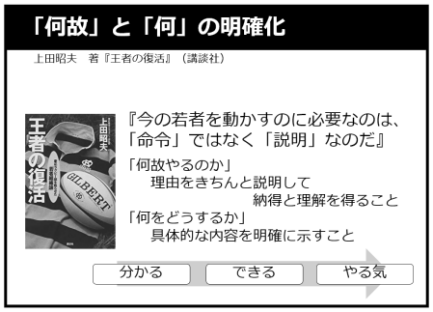


ペップトークが4つのステップで伝えるのは、
相手の気持ちの変化を生むためです。
今ある事実＝置かれてる状況や感情を受け入れ、
とらえかたを前向きに変える言葉をかけることで
相手に「わかる気」が生まれます。社会心理学では
「状況把握感」といい、相手が「その話、わかります」
とわかることがIステップです。
そして、前向きにとらえたことと本人のできることを
前向きなイメージを与える言葉で伝えると「できる気」
がします。これを「処理可能感」といい、相手は「それ
なら、できます！」という意思を持つことが2ステップです。
最後に、相手の想いに合わせた熱量で背中を押すことで「やる気」につながります。
本人が取り組むことに意味を持ち、納得する感覚を「有意味感」といい、自らの
「その気」が生まれてきます。自分の内側から出る「やる気」＝内発的動機づけを
引き出す言葉掛けが、ペップトークなのです。

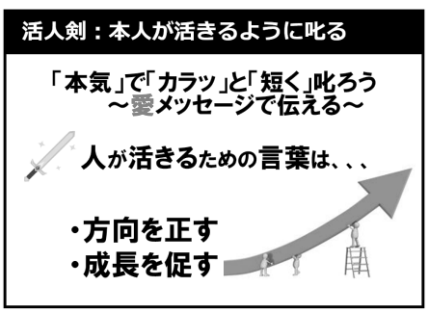
point 2 背景



『モチベーション3.0』（講談社）の著書ダニエル・ピン
ク氏によると、賞罰は他人によってモチベーションを上げ
ようとするアプローチ、すなわち「外発的動機づけ」なの
です。同氏によると、自らの内側から湧いて出てくるモチ
ベーション「内発的動機づけ」の方が、誰かにやらされる
外発的なものよりも、強く長く深い「その気」になります。
故上田昭夫慶応大学ラグビー部元監督は、部の100周
年でリベンジ優勝を果たした時に書いた『王者の復活』
（講談社）の中で、「今の若者を動かすのに必要なのは、
命令ではなく説明なのだ」と書かれています。何故やるの
かきちんと説明し、どれだけやるのかちゃんと指示するこ
とが大切です。



point 3 活人剣



指導する中には、説明だけで伝わりにくい場面もあります。
特に叱る時にはカラッとし、後を引かない「活人剣」をふ
るいなさいと道元禅師は説かれています。
「叱ること」と「怒ること」の違いは、はっきりしていま
す。叱るのは行動であり、怒るのは感情です。
負けや失敗の時と同じように、「叱られるようなことをし
たこと」を受け入れ、反省し、改善や成長のチャンスにす
るためには、声がけは大切な行動です。

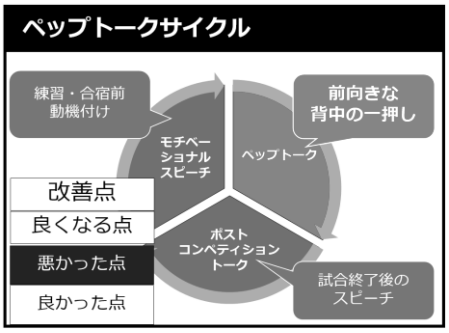
Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

3.ペップトークサイクル

ペップトークは本番前の激励のショートスピーチです。では、本番までの練習や本番が終わった後はどのような言葉を掛けるのか？ペップトークをより効果的に使うサイクルについて学びましょう！

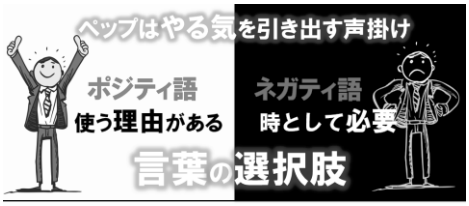
point 1 定義

**スポーツでは練習と試合を繰り返していきます。
指導者として選手に関わる際、場面により言葉も目的を持って変えていく必要があります。**

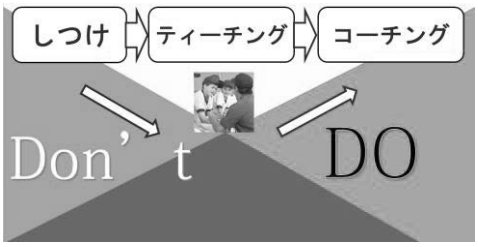


**①試合前：ペップトーク
試合に向けて、成功のイメージと前向きな心の状態を作るためポジティブな言葉を使い、短く、わかりやすく、思いを込めて伝えます。
②試合後：ポストコンペティショントーク
試合を振り返り、よかった点とよくなる点（改善点）を洗い出します。次の試合までに改善する課題を見つけ、意識づけを行います。そのため時には足りない部分を指摘することも必要となります。
③日々の練習：モチベーショナルトーク
課題に対して前向きに取り組んでいけるように、目的と課題克服のための具体的な行動を促します。選手一人ひとりの個性や性格も加味して声かけを行っていきます。**

point 2 特徴



**ペップトークサイクルは場面によっての言葉かけの違いを提示しています。時には厳しさも必要です。
ペップトークは前向きな言葉がけですが、状況によっても伝え方は変わります。必要に応じて厳しく指導することがあります。ただ厳しいことと相手の人格を否定することは違います。相手への敬意を持って接することが大切です。
ポジティブな言葉もネガティブな言葉も選択の幅を広げ、時と場合、相手との信頼関係によって言葉を決めていくことが指導者には求められます。**



point 3 言葉の温度

**言葉の選択と同じだけ気をつけたいのが、言葉の温度調節です。例えば、自分の言葉を水道から出る水だと考えた時に、温度が調節しにくい場合、相手には言葉の内容ではなく、「熱い」や「冷たい」のような感情的な部分しか受け取れない場合があります。相手に受け取れる温度を○○度と調整することで、相手に伝えたい言葉がしみわたります。
言葉を伝えるときに、自分の感情をコントロールし、温度調節する意識をもっていきましょう。**

Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

4.ポジティ語

ポジティ語はポジティブな言葉の表現の言葉であり、ペップトークの基本です。
ペップトークの❶受容❷承認❸行動❹激励の4ステップで変換のトレーニングをしていきましょう。

point 1 受容（事実の受け入れ）

事実の受け入れとは、相手の置かれている『状況』
その時に感じている『感情』をさします。本番前は日常とは違い
不利な状況や後ろ向きな感情になることもあります。
それをそのまま受け入れ、共感することを受容と言います。

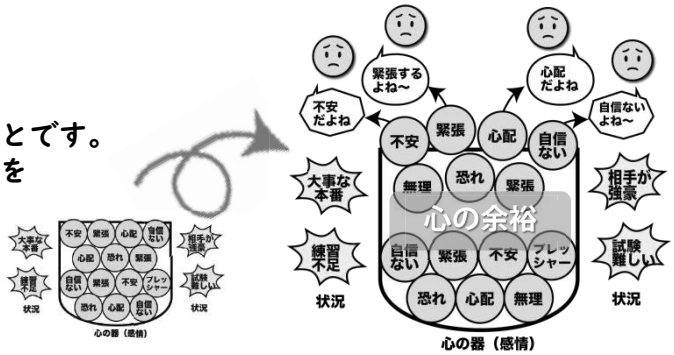
ポイントは、相手の状況や感情をくみ取るということです。

１、相手の状況を受け入れる（状況受容）
２、相手の感情を受け入れる（感情受容）

くみ取る

心の器（感情をくみ取る）

心の状態を器と液体で例えます。
大切な本番前や難しい試験など状況があり
それに影響して、感情が溢れだします。
受容とは、その気持ちをくみ取るということです。
心の余裕を生み出すために、心にある感情を
言葉にして伝え、くみ上げることで
心にスペースをつくろうとするのが
受容の声掛けです。



point 2 承認（とらえかた変換）

❷承認（とらえかた変換）では、❶受容で受け入れたネガティブな状況や感情をポジティブにとらえなおしたり、ないものからあるものにフォーカスを変えていきます。

ポイントは、見方を変えるということです。

１、とらえかた変換
　とらえかた変換は、コインをひっくり返すようにネガティブな言葉をポジティブな言葉の表現に変換します
２、あるもの承認
　あるもの承認は、ネガティブを受け入れ、それ以外に何があるかと、フォーカスをかえます。パズルのあるピースに注目です

見方を変える

Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

4.ポジティ語

ポジティ語はポジティブな言葉の表現の言葉であり、ペップトークの基本です。
ペップトークの❶受容❷承認❸行動❹激励の4ステップで変換のトレーニングをしていきましょう。

point 3 行動（してほしい変換）

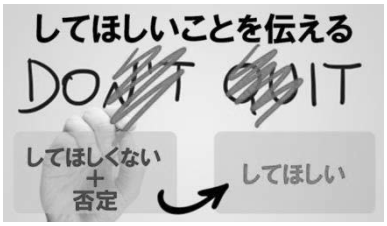
❷承認で相手の気持ちにできる状態にしたところで、
❸行動では相手のしてほしいことをポジティブな表現で伝えていきます。

ポイントは、相手と同じイメージを描くということです。

１、成功のイメージを描く前向きな言葉を使う
２、結果でなく、行動を伝える

結果の指示をした場合、相手がプレッシャーを感じてしまうことがあります。その場合は、その結果を得るためにどんな行動をしたら良いかを考え、結果から行動に変えていくと有効です。

イメージを描く



脳の働き（イメージは現実化する）

頭の中はGoogle画像検索に似ている。

日本語の特徴として、してほしくないこと+否定形で伝えがちです。「失敗するな」は「失敗」という言葉をイメージしてしまいます。
私たちは脳でイメージしたことを、無意識的に現実化しようとしています。意識的には成功したいと思っていても、脳が失敗をイメージした場合、私たちの全身の数十兆の細胞はイメージを現実化しようと働きます。つまり失敗を成功させようとするのです。
成功のイメージのために、「～しよう」と伝えましょう。

point 4 激励（背中のひと押し）

❸行動でしてほしいことをポジティブな表現で伝えた後
❹激励で相手が勇気を持っていけるように背中をグッと押して送り出します。

ポイントは、相手に合わせた背中のひと押しです。

１、激励系で強く押す
２、見守り系で優しく押す

相手に合わせる

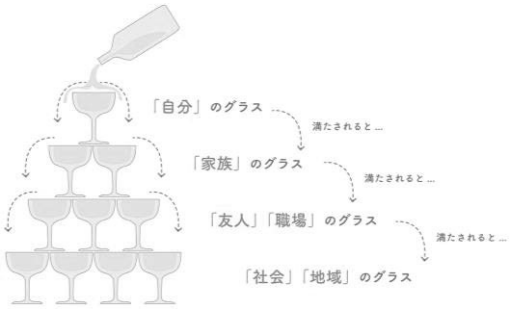
Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

5.セルフペップトーク

セルフペップトークは、自分に掛ける励ましの言葉です。
誰かを応援するためにも、自分が満たされている状態が大切です。
自分の応援団長は、自分です！
まずは自分を励ます言葉を考えてみましょう。

point 1 自分を満たす（インサイドアウト）

一番最初に応援するのは、自分です。
シャンパンタワーの頂上が自分のグラスです。
自分が元気や活気にあふれているから、
前向きな言葉の波紋が、家族や友人、そして
社会へ広がり、元気や活力が広がると考えています。



自分が満たされずに、応援しようとすると
もしかしたら自己犠牲になるかもしれません。
まずは自分のグラスを満たす言葉を自分に掛けましょう。

point 2 ３３７ペップ

協会では３３７拍子のリズムに合わせた自分への励ましの
言葉を３３７ペップとしてお伝えしています。
３３７拍子のリズムは、応援や童謡などに使われ、私たち
を前向きにするリズムです。リズムに前向きな言葉を加え
ることで自分を励ましましょう。

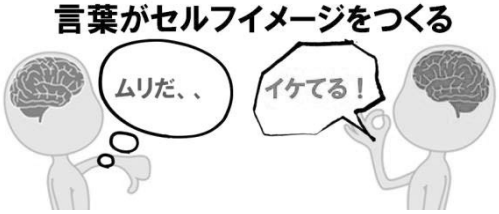
きみの想いと笑顔 長く仲間 今だ今日のここができる
こころ叶う言葉のちから 夢の世界行ける幸せになる あふれ幸せ いればだそうだ ためにきみの夢の舞台できる
信じてすすめ 夢の世界 幸せになる いばらの道も 進んでいける もってる力 つちかってきた きみならできる
いつもそばで見守っている きみと歩む優しい家族 ともにつくる幸せのくに 分かちあえるありがとうの輪 辿りつける いるべき場所に 待つて世界の友が いるよ
元気 行こう 虹のペップ
活気 共に 下に トーク
勇気を胸に 未来の国へ 広がる世界 味方につけて

３３７ペップを作ろう

自分の励ます３３７ペップを作ってみましょう。

point 3 ペップな口癖

普段あなた言うペップな口癖はどんな言葉ですか？
言葉がセルフイメージを作ります。
ペップな口癖を意識し、プッペな口癖が出た時に
言葉を言い換えてみると気分が変わります。



Copyright @ 2016 Japan Peptalk Association All Right Reserved.

東京都高体連研究部の活性化のために

－高体連研究部との 20 年のかかわりの「記録」と「思い」－

全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 前委員長
東京都高等学校体育連盟 サッカー専門部/研究部 委員
筑波大学附属高等学校 保健体育科教諭
中塚義実

Ⅰ．はじめに

1987 年の着任以来、異動もなく 35 年が経過しようとしている。保健体育科教師として、ホームルーム担任として、または校務の担い手としてさまざまなことに取り組んできたが、部活動顧問としての学校内外の諸活動から得られた財産は言葉にできぬほど大きなものがある。そもそも自分自身のサッカーとの組織的なかかわりは中学時代の部活動からであるし、高校、大学時代に多くの時間と労力を注いできたのも部活動である。大学院時代は県立高校の外部コーチの経験もした。大学院を終えたときには「指導者を育てる現場で働きたい」と考えるようになっていたが、縁があったのは高校の指導現場である。「現場にどっぷりつかるやろなあ」と思っていた通りの 35 年。還暦で定年を迎える。

そのタイミングで、東京都高体連研究大会の紀要原稿の打診があった。「中塚さんの経験をまとめてもらえませんか」という依頼である。いまの東京都高体連研究部からはひと昔前の“勢い”や“熱さ”が感じられず、「何かを伝えなくては」と思っていたのでちょうどよい機会である。紀要掲載だけでなく研究大会でも時間を確保してほしいとリクエストしたが、しばらく回答がないまま「1 月 6 日が原稿締め切りです」との連絡がいきなりきた。コロナ禍の影響もあるだろうが、「ホーレンソー」の不徹底は大きな課題である。今後はしっかりとした対応を期待する。

依頼の過程に不満はあるが、歴史を伝える貴重な機会と捉え、「高体連研究部との 20 年のかかわり」の「記録」をとどめておきたい。個々の資料には意味や背景があり、そこに秘められる“魂”こそ重要である。行間をつなぐ「思い」についても述べていきたい。同時代を過ごされた方には「思い」を語る契機として、次代の担い手の方には過去を踏まえてステップアップする材料としてご一読いただければ幸いである。

注）原則として本文中の個人名は敬称略。肩書や所属は当時のまま。年号は西暦を用いて表す。

Ⅱ．東京都高体連研究部・研究大会創設のころ

１．研究部創設以前（1980 年代後半～1990 年代）

東京都高体連サッカー専門部内に「サッカー科学研究会」という名の研究組織が立ち上がったのは 1995 年度のことである。発起人は喜熨斗勝史（都立杉並工業）注 1)、小澤治夫（筑波大学附属駒場中高）注 2) と私である。東京教員サッカークラブのチームメート（当時の私は監督兼選手）であった喜熨斗氏から勉強会の構想を持ち掛けられた私は、当時すでにいくつかの研究会に属していたのであまり乗り気ではなかったが、「小澤さんが乗ってくれるのなら、専門部の総会で承認してもらってしっかりやろう」と逆提案した記憶がある。筑波大学附属学校同士で当時から交流があった小澤氏は、現場にいながら医学博士を取得された学究肌の指導者で、高校の指導現場に科学的な手法を取り入れ積極的に情報発信されている方である。どうせやるなら「勝手にやっている」と思われるものでなく、しっかりした形にしたかったのである。1995 年 1 月の全国高校サッカー選手権大会運営の合間に話を進め、3 月の総会で承認、4 月に会員を募集して月例会がはじまった（補足資料：東京都高体連サッカー科学研究会のあゆみ（1995～2005）参照）。

4 月の総会で希望者に名前と住所を書いてもらい、年会費 1,000 円を徴収する。いまとは異なり E メール

はないので、会員には毎月葉書で案内を送っていた。代表兼事務局は私である。職場の同僚には研究会を主宰する方も多く、学校の印刷機の葉書印刷機能で案内を作っていたのを参考にした。これらの作業は日常業務が終わって部活動指導も終わる夜間か週末に行う。遅くまで残る先生が多い職場だったので「当たり前」だし負担感はなかった。1996 年度にユースサッカー「DUO リーグ」注3）を創設する前年度のことである。

このころの私は、日本サッカー協会（JFA）科学研究委員会の委員でもあった。委員は大学教員が中心で、ゲーム分析や体力測定、全国大会出場チームの活動実態調査などを行っていた。大学院生のころから同委員会メンバーを中心とする「サッカー研究会」に顔を出すようになったのは、修士論文のテーマを「日本サッカーのプロ化」に定め、情報やアドバイス、そして何よりつながりを求めていたからである。1986 年の日本体育協会スポーツ憲章制定と JFA スペシャル・ライセンスプレーヤー（プロ選手）制度導入の背景を、1965 年の日本サッカーリーグ発足前後から追う歴史社会学的研究である。当時、アマチュアリズムの終焉とプロ化のうねりが日本のサッカー界に押し寄せ、価値観の相違を乗り越えながら具体的な対策が検討・試行されていた状況は、いまの部活動改革の動きに重なってみえる。

「サッカー研究会」のために筑波から東京へ出てくるのは大変で、毎回の参加は難しかったが、1987 年に現職に就いてからは都内で開かれる月 1〜2 回の勉強会にはほぼ毎回参加した。「サッカー研究会」参加者で社会学や心理学に関心を持つ人による「社・心グループ」の勉強会もこのころ始まり、1990 年代になると私が主導するようになっていた。特定非営利活動法人サロン 2002 注4）につながる研究会である。

もちろん本業は高校教師である。日々の授業や部活動、生徒指導には全力で向き合った。予想通り現場に「どっぷりつかる」毎日である。高体連サッカー専門部での大会運営や東京教員サッカークラブでの競技者（のちに監督兼選手）としての活動もあり、充実の日々であった。このころの仲間は一生の同志である。

一方で、自分の研究テーマであるはずの「日本サッカーのプロ化」は、選手がプロ契約できるようになった段階から仕組み自体が大きく変わる、日本のスポーツの大改革につながる動きになっていた。研究者の端くれとして高校現場からの視点を残しておきたいと考え、「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」と題する調査研究を 1991〜1995 年度に実施し、『高校サッカー年鑑』に報告を掲載した注5)。また日本サッカー協会機関誌 JFAnews に連載「ユース年代のサッカーはいま！」注6) の機会を得て、調査からみえるものと、日ごろの実践（ユースリーグや学校運動部のクラブ化など）を紹介した。いまなら研究部の課題研究で取り上げたい内容である。

２．研究部員になったころ（2000 年代〜）

「各専門部から研究部に 1 名ずつ委員を出すことになった。中塚君、やってくれないか」と、サッカー専門部の総会後、当時の専門部委員長から打診されたのは 2003 年度末か 2004 年度初めだったと思う。私に声がかかったのは、上記の背景から必然だったと言える。加えて「頼まれれば NO とは言わない」私の性格を、先輩方はご存じだったのだろう。余談になるが、たとえば 1994 年 7 月 29 日の富山市内で、私は当時の東京都高体連サッカー専門部委員長から「東京都サッカー協会（TFA）のフットサル委員をやってくれないか」と頼まれ快諾している。この記憶は鮮明である。前記「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」の調査依頼を監督者会議で行うためにインターハイ会場の富山市に赴き、「夜の街」でばったりお会いしたところで声がかかったのである。その場で OK の返事をした私の感覚は、「先輩に言われたら逆らえない」でなく「おもしろそう」であった。体育会系の上下関係は確かにあったが、少なくとも私のまわりでそれを感じたことはほとんどない。一方、おもしろそうなことを直感的に判断する習性はある。いまでも TFA フットサル委員会の最古参委員として高校生年代のフットサルの普及・振興に力を注ぐ原点がここにある注7)。

さて、研究部の会議に私が初めて参加したのは 2004 年 6 月 18 日、会場は「こまばエミナース」であった。各専門部から 1 名ずつ委員が集まり、説明を受けた。しかし私の頭には何も入ってこない。自分はサッカー専門部の一員であって研究部については門外漢の意識があったのだろう。「サッカーではすでにやって

いる」という“上から目線”もあったかもしれない。謙虚さに欠ける姿勢では何も入ってこない。

おそらくそこで取り上げられた議題は「研究部の組織づくり（規約制定）」と「研究大会の開催」だったはずである。研究部の何たるかを知らず、研究大会を高体連が実施していることも知らない若輩者は、当事者意識の低い参加者であった。はじめて研究部の会議に参加される方は、いまでもこのような意識をお持ちなのではないだろうか。

それでもサッカー専門部を代表して委員となった以上、会議には出なくてはならないし、少しでも存在感を残しておきたい。どのような人が来ているのかにも興味があったので、会議後の懇親会（数人で「行きますか」程度だった）には好んで顔を出していた。ほとんどの人が私と同様、よくわからないまま会議に来ていたことがわかり、打ち解けるのは早かった。

他校の先生と話をする機会は、たいていの場合サッカーを通してのつながりである。他の専門部の方と話をする機会はほとんどない。研究部の方々との会話は新鮮で、多くの経験を積んでこられた諸先輩方との交流はとても楽しかった記憶がある。

「東京都高体連サッカー科学研究会」をやっていることももちろん話した。みなが興味を持ち、やがて他の専門部の方も参加するようになった。2004 年 10 月 1 日は「フェンシング専門部より」の話題、2005 年 1 月 14 日は「第 1 回 東京都高体連研究大会準備会」で、東京都高体連研究部第 3 分科会の会議を兼ねて開催した記録がある。当時からいくつかの会を主宰していた私は、複数の性格を持つ会を開き、組織を超えた交流の場とすることをたびたび行っていたのである。サッカー界で指導者向けの勉強会・研究会が充実してきたからか、「東京都高体連サッカー科学研究会」の求心力が徐々に低下してきた時期でもあった。

同研究会は 2005 年 6 月の通算 99 回を最後に活動を休止することになった。表向きの理由は、高体連に研究部が設置されたことで当初の使命を終えたということである。

平成 17（2005）年 2 月 26 日（土）に東洋高校で「第 1 回 東京都高等学校体育連盟研究大会」が開催された。毎回発行される紀要には、研究部の組織と名簿が掲載されている。佐治恒孝部長、草木繁生委員長（陸上競技女子）、田中茂好副委員長（体操男子）、常任委員に松田宣之（バレーボール女子）、家村誠也（ラグビー）、中島昭雄（バドミントン）、松原道雄（登山）、内海秀一（柔道）、柳清司（剣道）、中塚義実（サッカー）、監事に家弓明丈（テニス）、金澤宏一（少林寺拳法）が名を連ねている。このころは私にも、研究部の当事者としての意識が芽生えていたと記憶している。

第 1 回大会研究紀要冒頭のあいさつ文に、当時のことが記されている。

研究大会にあたって

東京都高等学校体育連盟

会長　鳴海靖郎

東京都高等学校体育連盟の記念すべき第 1 回研究大会が、東京都教育委員会の後援をいただき、盛大に開催する運びとなりました。ここに至る関係各位の並々ならぬご尽力に心より感謝申し上げます。

全国高体連の 39 回をはじめとして、各県高体連研究大会がそれぞれ歴史を刻んできた中で、本連盟としての第 1 回研究大会については、意外な印象をお持ちの方も多いことでしょう。要因として、平成 12 年度まで全国高体連と東京都高体連は一体であり、直接、全国研究大会の開催・運営に携わってきたことを挙げることが出来ます。ただし、研究発表については、他県同様に、各専門部のご努力により実績を重ねてきたところです。

平成 13 年度、全国高体連の財団法人化に伴い、都高体連は事務局を都立駒場高校に移し新たな活動を開始しました。この年、早速本連盟研究部としての規約策定にとりかかり、規約は翌平成 14 年度の総会（理事会・評議員会）で承認され、活動の基盤を整えることが出来ました。そして昨年度は、研究部として全国大会への研究発表に勤しむ中、都高体連としての第 1 回研究大会開催要項（案）を作成・検討するまでに至りましたが、日程調整等により見送らざるを得ませんでした。この様な経緯と先達のご努力が実り、第一回の研究大会を迎えることは、誠に感慨深いものがあります。（中略）

おわりになりますが、改めて、後援者である東京都教育委員会、研究部の規約策定にご尽力いただいた小久保敦央氏、全国大会での発表の傍ら都研究大会への機運を高めていただいた日下修次氏、そして第 1 回研究大会にご努力いただいている草木繁生副理事長をはじめ、ここまでに至る多くの関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げると共に、本大会が実り大きく、且つ次回以降の更なる充実を心より祈念し挨拶といたします。

文中にある「昨年度は、研究部として全国大会への研究発表に勤しむ中～」は、2003 年 1 月に福島県で開催された第 38 回全国高体連研究大会の第 2 分科会で日下修次（日本大学鶴ケ丘）が「競技用品の安全性について－空手道競技の場合」を発表されたことを指す。草木氏の前の委員長が日下氏であり、東京都高体連研究部創設時にご尽力された方と記憶している。なお、福島大会は私にとって最初の全国研究大会であり、その後は、コロナ禍で直前に中止となった長崎大会を除きすべて参加している注8)。全国大会参加に際しては、同僚の先生方の理解と支援を毎回いただいている。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

東京都高体連研究大会は、2006 年 2 月 18 日の第 2 回大会から目白大学で開催されるようになった。経緯については第 2 回大会研究紀要の挨拶文に記されている。

研究大会にあたって

東京都高等学校体育連盟

会長　佐藤幸夫

（略）研究大会の趣旨は、「日頃の研究、指導成果を発表するとともに高体連の直面する諸問題について情報交換し、高等学校における体育・スポーツの振興と生徒の健全育成に資する」ことにあります。今年度は、都高体連事業見直しの一環として、「優秀研究・優秀校表彰式」と同一日程で行いましたが、会場の確保については目白大学に特段の配慮をいただきました。（以下略）

第 3 回大会は 2007 年 2 月 17 日に目白大学で開かれた。挨拶文には当時の部活動をめぐる状況が記されている。いまでは働き方改革の観点も加わり、部活動改革は待ったなしの状況にあることは周知のとおりである。

研究大会にあたって

東京都高等学校体育連盟

会長　柿添賢之

（略）都高体連では、全国高体連研究大会が 40 回という歴史を重ねる中で、研究活動の重要性は認識されながらも、長きにわたって一部専門部内の研究活動にとどまっている状況が続いていました。鳴海靖郎元会長と佐藤幸夫前会長の、教育の専門職で組織される高体連が研究活動をおろそかにすることは許されないとの強い思いから、約 3 年を費やし、組織の再編と規約の策定、予算措置等を講じて、平成 16 年度に第 1 回大会開催が実現しました。

当連盟を取り巻く状況は、少子化による生徒減少や部活動離れ、教員定数の削減や教員の高齢化による指導者不足、専門部によっては財源難、さらには商業主義や勝利至上主義が進む中で高校スポーツの在り方が問われるなど、多くの問題に直面しております。これらの諸課題の解決に向けて、継続的、組織的に調査・研究に取り組むことは、高等学校における体育・スポーツの振興と生徒の健全育成にとって極めて重要であります。その意味で、本研究大会が回を重ね、定着できたことは極めて意義深いことであります（以下略）

第 4 回大会は 2008 年 2 月 16 日、第 5 回大会は 2009 年 2 月 21 日に開かれ、東京都の研究大会は軌道に乗った。全国大会同様、3 分科会ごとに発表枠を設け、すべての専門部がひととおり発表することを求めていた。そのため未発表の専門部には草木委員長から声がかけられた。発表者は個人・専門部・分科会などい

ずれも可であるが、分科会ごとの取り組みが奨励されていた。

それにしても、創設期における草木繁生氏の献身的な働きには頭が下がる。このころ、全国高体連研究部事務局は関東各都県が 2 年周期の輪番で担当していた。この仕事は、他県では県高体連事務局が請け負うか、そのための要員が加配されることが多いのだが、2005～06 年度の東京都にはそのような配慮が為されないまま草木氏が通常業務の傍ら担うこととなった。相当な負担があったはずである。ときどき愚痴もこぼしておられたが、そこが草木氏らしい、人間味あふれるところである。細かな気遣いとともに、先を見通しリーダーシップを発揮される草木氏のもと、初期の東京都高体連研究部はワンチームとなった。

東京都高体連研究部の会議資料はいまだにそのころのものが使われている。それだけ普遍性の高い準備が為されていたと言えるが、逆にその後の東京都高体連研究部が、ただ単に「前例踏襲」に陥り、せっかくの人材、恵まれた環境をほとんど生かせないままいまに至るのがもどかしい。

東京都高等学校体育連盟　研究部組織・研究大会一覧（2004～21）

回	年度		東京都高体連	東京都高体連研究部			研究大会			
			会長	部　長	委員長	副委員長	期日	時間	会場	参加者
1	2004	平成16	鳴海 靖郎	佐治 恒孝	草木 繁生	田中 茂好	平成17(2005)年2月26日	14:30～18:30	東洋高校	132
2	2005	平成17	佐藤 幸夫	柿添 賢之	草木 繁生	中塚 義実	平成18(2006)年2月18日	15:00～17:40	目白大学	111
3	2006	平成18	柿添 賢之	上原 健夫	草木 繁生	中塚 義実	平成19(2007)年2月17日	15:00～18:00	目白大学	119
4	2007	平成19	中川　恵	上原 健夫	草木 繁生	中塚 義実	平成20(2008)年2月16日	15:00～18:10	目白大学	132
5	2008	平成20	中川　恵	山崎 廣道	草木 繁生	中塚 義実	平成21(2009)年2月21日	15:00～18:25	目白大学	？
6	2009	平成21	中川　恵	山崎 廣道	草木 繁生	中塚 義実	平成22(2010)年2月20日	15:00～18:30	目白大学	145
7	2010	平成22	中川　恵	山崎 廣道	草木 繁生	中塚 義実	平成23(2011)年2月19日	15:00～18:30	目白大学	160
8	2011	平成23	山崎 正己	熊谷 通眞	嶋崎 雅規	中塚 義実	平成24(2012)年2月18日	15:00～18:00	目白大学	150
9	2012	平成24	山崎 正己	熊谷 通眞	嶋崎 雅規	中塚 義実	平成25(2013)年2月17日★	13:30～16:30	目白大学	130
10	2013	平成25	大井 俊博	熊谷 通眞	嶋崎 雅規	中塚 義実	平成26(2014)年2月15日	15:00～18:00	目白大学	124
11	2014	平成26	大井 俊博	熊谷 通眞	嶋崎 雅規	中塚 義実	平成27(2015)年2月14日	15:00～18:00	目白大学	136
12	2015	平成27	大井 俊博	野口 敏朗	塩田 伸隆	中塚 義実	平成28(2016)年2月13日	15:00～18:00	目白大学	125
13	2016	平成28	大田原 弘幸	庄司 一也	塩田 伸隆	中塚 義実	平成29(2017)年2月19日★	13:30～16:30	目白大学	125
14	2017	平成29	久保　淳	庄司 一也	塩田 伸隆	中塚 義実	平成30(2018)年2月17日	15:00～18:00	目白大学	144
15	2018	平成30	久保　淳	庄司 一也	塩田 伸隆	中塚 義実	平成31(2019)年2月16日	15:00～18:00	目白大学	122
16	2019	平成31/令和元	奥秋 將史	庄司 一也	田中 康之	中塚 義実	令和2(2020)年2月15日	15:00～18:00	目白大学	121
17	2020	令和2	奥秋 將史	高野　学	田中 康之	中塚 義実	令和3(2021)年2月13日【中止】		目白大学	－
18	2021	令和3	奥秋 將史	高野　学	田中 康之	鞠子 智秋	令和4(2022)年2月19日【中止】		東京都研修センター	－

★は日曜日開催

Ⅲ．研究部の活性化に向けて－全国高体連研究部活性化プロジェクト・委員会（2008～）

2007 年度から全国高体連研究部の改革が本格的に動き出した。研究部推進委員会の設置である。しかし推進委員の大半は常任委員を兼ねており、委員は全国に分散している。いまと違ってメールでのやり取りは滞り、リモートワークは夢物語の時代である。年 2 回の常任委員会の前に開かれる推進委員会だけでは、スピード感を伴った改革は進まない。

翌 2008 年度、全国高体連の梅村和伸専務理事の問題提起を受けた山崎廣道全国研究部長から、推進委員会のサブグループとして「活性化プロジェクト」創設が提案され、人選も含めた組織づくりを私に一任された。東京都高体連研究部委員長の草木繁生（都立松が谷／陸上競技女子）とともに嶋崎雅規（帝京／ラグビー）、柳清司（都立足立東／剣道）に声をかけ、活性化プロジェクトは 2008 年 7 月に始動した。アドバイザーを置くことを提案し、かつて「高体連サッカー科学研究会」にともに取り組んだ小澤治夫（東海大学）にも加わってもらった。多忙を極める小澤氏はほとんど会合には参加できなかったが、E メールで情報を共有し、適宜アドバイスをいただいた。

2008 年 7 月 2 日の第 1 回ミーティングでは、「いつまでに、何を、どこまで詰めるか」をまず確認した。高体連という大組織で改革を進めるには、意思決定の手順の確認が不可欠である。意見聴取のための「たたき台」をいつ、どこで提示するか、最終的にはどのレベルの会議で意思決定してもらうかについて全体像を

把握するのが先決である。議論すべき高体連研究部の可能性と課題については、各自が付箋に自由に書き込み、それをもとに意見交換したのを覚えている。

第2回は7月30日、第3回は9月8日に行い、9月18～19日の推進委員会及び常任委員会（このころは1泊2日の開催であった）で「高体連研究部の活性化に向けてー活性化プロジェクト中間報告」を示した。これが改革の骨子となり、2009年1月の全国大会（岡山）において全体に向けて提示した。

全国高体連で動き始めた研究部活性化へ向けての取り組みは、東京都にも連動する。全国高体連研究部長は東京都高体連研究部長でもあったのである。平成21（2009）年2月21日の東京都高体連研究大会終了後、短時間で研究部委員会が開かれた。そこで山崎廣道部長名で配布された文書「東京都高体連研究部の活性化に向けて」には、新しい時代に向けての意気込みが記されている。

東京都高体連研究部の活性化に向けて

東京都高体連研究部

部 長 山﨑 廣道

Ⅰ. はじめに

高体連の活動において「専門部と研究部は車の両輪」と言われています。高校スポーツをめぐるさまざまな問題が噴出する中、ことに財団法人化以降、高体連には単なる「運動やさん」「イベントやさん」としてだけでなく、高校生の体育・スポーツ活動を包括的に捉え、よりよい方向に導くことが求められており、研究部の活動の重要性は高まっています。「全国研究大会」は、実に 43 回の歴史を誇る、高体連の大きな行事として位置づけられています。また、いくつかの都道府県においては先進的な取り組みも行われ、徐々にではありますが、研究部の活動が活性化の兆しを見せているようにも感じられます。

しかし全体的にみると、高体連活動の中心は、依然として「総体」を頂点とした「競技」の部分であり、「研究」活動には、あまり大きな力が注がれないまま来ている傾向は否定できません。

「高体連」は、様々な現場を持っており、これを活かせば、多くの素晴らしい研究が生まれ、「運動部活動」をよりよいものに変えていくための大きな力になるはずです。そのためには、研究活動に組織的・継続的に取り組んでいく必要があります。

Ⅱ. 研究推進委員会、高体連研究部活性化プロジェクト

そこで、研究部の更なる発展・充実を目的に各ブロックの代表が集まって、平成 20 年 1 月の全国研究大会前日に、「第 1 回推進委員会」が開催されました。この席上では、発表の都道府県や内容が数年先まで決まっていて、直近の課題に対応できていない研究大会の硬直化した現状が問題となりました。

さらに、平成 20 年 5 月 16 日の「企画委員会」で梅村専務理事から示された「全国高体連専務理事の経営方針を受けて、中塚義実氏（筑波大学附属高校）を委員長として 4 名の教員とアドバイザーとして東海大学の小澤治夫先生にも入っていただき、「高体連研究部活性化プロジェクト委員会」が組織され、全国高体連研究部・山崎部長のもと、全国研究大会の活性化に向けて協議を重ねてまいりました。

そこでは、現行の 3 分科会（競技力向上、健康と安全、部活動の活性化）では網羅しきれない内容があること、意欲的な個人研究を拾うことができないことなどが、問題点として挙げられました。今後は、それらを「課題研究」として公募の形で取り上げることとなり、来年度の山形大会では、2 本の発表が行われることがすでに決定しています。

このように、全国研究大会の改革はすでに始まっています。

Ⅲ. 東京都高体連における研究部・研究大会の現状と課題

全国研究大会が 40 回を越える歴史を重ねる中、東京都高体連においても研究活動の重要性は認識されてはいましたが、長きにわたって一専門部内の研究活動にとどまっている状況が続いていました。

そこで、鳴海靖郎・佐藤幸夫両元会長の時代に、「教育の専門職で組織される高体連が研究活動を疎かにすることは許

されない」との強い思いから、約 3 年間を費やし、組織の再編と規約の策定、予算措置等を講じて、平成 16 年度に第 1 回東京都高体連研究大会開催が実現し、今年で第 5 回を迎えました。

しかし、東京における研究活動の推進が順風満帆とはいえない現状もあります。東京都高体連の研究部組織は、各専門部から選出された研究部担当に集まっていただく形で、約 40 名で構成されています。しかし、研究活動に対する考え方は、各専門部やその担当者によってばらつきがあり、集まって話をする回数も多くはありません。都の研究大会も、限られた人たちの努力によって何とか運営しているという面も見られます。

Ⅳ. 東京都高体連研究部の活性化に向けて

今後、東京都高体連の研究活動を充実させていくためには、どのような方策が考えられるでしょうか。

折しも 2013 年には東京国体が開催されます。各専門部とも、国体に向けて強化に励んでいることと推察されます。そこでまず東京国体に向けての強化の取り組みについて、各専門部から報告していただきたいと思います。それぞれの専門部の取り組みの中には、他の専門部でも参考になるようなヒントがたくさん埋もれているはずです。そうした情報を共有することを第一歩として、新たな研究活動に取り組んでいきたいと考えています。

また、こんな強化に取り組んでみたいというプランの提示も歓迎します。現実的には、予算等の関係で実現しないものの中にも、素晴らしい取り組みがあるはずです。

さらには、現在専門部として取り組んでいる研究がありましたら、その内容についても報告していただきたいと思います。剣道専門部のように、専門部の中に調査研究部を設けている専門部もあるようです。

平成 21 年度に、研究部の委員になられる方におかれましては、第 1 回の委員会の席上で上記の内容につきまして簡単な報告をお願いします。また、積極的に研究活動に取り組んでおられる方がいらっしゃるという専門部につきましては、 複数の方を研究部の委員として選出していただくことも歓迎いたします。

数多くの方々のお力を結集して、東京都高体連の研究活動が活性化していくことを望んでおります。

2008 年度にはじまる全国高体連研究部活性化プロジェクトは、2010 年度より活性化委員会となり、研究部・研究活動の方向付けをする機関として今日も重要な役割を担っている。研究部事務局も関東輪番でなく全国高体連事務局に置かれるようになり、名実ともに「専門部と研究部が車の両輪」となった。2015 年度には「研究大会 50 年のあゆみ」をまとめ、先人たちの功績といまの動きを全国大会研究紀要に掲載した。

私は 2010～19 年度末まで活性化委員長を務め、2020 年度より鞠子智秋（都立清瀬／サッカー）に委員長を譲った。その後は委員として側面からサポートする立場である。

全国高体連研究部活性化委員会については多くの「記録」が、データと何冊かのファイルのかたちで全国高体連事務局に置かれている。しかし本当に大切なのは「記録」には残せない「思い」の部分である。歴代研究部長は、ときには体を張って主張すべきことを主張し、ときには腹の中にぐっとしまい込んで活性化委員会の活動を見守り、支援してくださった。そのおかげでここまでやってこられたのは間違いない。歴代研究部長の名を記し、心より敬意を表したい。

山崎廣道（2008～10）、熊谷通眞（2011～13）、野口敏朗（2014～15）、庄司一也（2016～19）、
高野学（2020～21）

全国高等学校体育連盟　研究部活性化委員会　構成員（2008～21）

年度	研究大会	活性化委員会										
		部長	副部長(在京)	委員長	委　員					アドバイザー		
2008　平成20	岡山	山崎廣道	－	中塚義実	嶋崎雅規			草木繁生	柳清司	小澤治夫		
2009　平成21	山形	山崎廣道	－	中塚義実	嶋崎雅規	＜千葉＞		草木繁生	柳清司	小澤治夫		
2010　平成22	兵庫	山崎廣道	－	中塚義実	嶋崎雅規	南部健		草木繁生				
2011　平成23	鹿児島	熊谷通眞	－	〃	〃	〃		〃		毎日新聞社:高橋宏明・落合博・(戸山芳樹)		
2012　平成24	栃木	熊谷通眞	－	中塚義実	嶋崎雅規	南部健	＜山梨＞			毎日新聞社:高橋宏明・落合博・(阿相久志)		
2013　平成25	岐阜	熊谷通眞	－	〃	〃	〃	小澤和真					
2014　平成26	徳島	野口敏朗	熊谷通眞	中塚義実	嶋崎雅規	南部健	＜山梨＞	＜埼玉＞				
2015　平成27	宮城	野口敏朗	庄司一也	〃	塩田伸隆	〃	三浦和雄	秋元秀之			＜読売新聞社＞	＜早稲田大学＞
2016　平成28	富山	庄司一也	清水智之	中塚義実	〃	南部健	〃	〃	＜茨城＞		川島健司	中澤篤史
2017　平成29	島根	庄司一也	清水智之	〃	塩田伸隆	〃	－	阿部　守	須藤崇文		川島健司	中澤篤史
2018　平成30	山梨	庄司一也	清水智之	中塚義実	鞠子智秋	南部健	＜神奈川＞	津田孝弘	－		川島健司	中澤篤史
2019　平31/令元	滋賀	庄司一也	高野　学	〃	〃	石毛宏幸	松尾賢太郎	－	－		川島健司	中澤篤史
2020　令和2	長崎	高野　学	小宮徳健	鞠子智秋	中塚義実	宮川　明	松尾賢太郎	－	－	庄司一也	川島健司	中澤篤史
2021　令和3	青森	高野　学	小宮徳健	〃	〃	宮川　明	松尾賢太郎	－	－	庄司一也	川島健司	中澤篤史

注）2008～09年度は活性化プロジェクト

Ⅳ．東京都高体連研究部のその後－第 3 分科会を中心に（2006～2009）

さて東京都高体連研究部のその後である。草木委員長の後任は副委員長の中塚が継ぐのが一般的な人事の流れだろうが、私が活性化プロジェクトのリーダーとなったため、東京都の委員長は嶋崎氏に担ってもらうこととなった。私は東京都においては引き続き副委員長で第 3 分科会の代表を務めていた。

東京都高体連の研究活動は、3 分科会に分かれて進める形をとっていた。2 月の都研究大会で分科会発表ができるよう、分科会ごとに数回の会合を持ち、テーマを決めて調査・研究活動に取り組んでいた。

4 月の委員会が全体の顔合わせの場である。交通の便が良い筑波大学附属高校で行うことが多いこの会議は、まずは当該年度の研究部の構成員・組織の確認からである。2 年任期ではあるものの、専門部の事情で委員が交替することも多く、そのため毎年の確認が必要となる。ここで事前の根回しが為されていないと無為な時間を費やすことになる。私が初めて研究部の会議に出た時と同じように、初参加の方は何の話をしているのかさっぱりわからないだろう。だから会議を進める側は、丁寧な説明を心掛けるべきである。資料に書かれている内容の背後にある「思い」（経緯や背景）をしっかり伝えなくてはならない。

18：30 に会議が始まり、1 時間ほど全体会で上記の話をした後、事前調査をもとに割り振られる分科会ごとに情報交換の時間を持つのが通常の進め方である。私が代表を務めたころの第 3 分科会は、互いの自己紹介の中で「部活動の活性化」に関連するトピックを、専門部や勤務校について語ってもらうようにしていた。これがけっこうおもしろい。部活動の可能性や課題についてのエビデンスが凝縮している。第 3 分科会は人数が多いので時間はかかるが、他専門部や他校の話が聞けるので参加者はそれなりに満足して帰路についたことだろう。会議のあとは懇親会。こうした習慣が少しずつ薄れ、コロナ禍では対面の会合すらほとんど為されなくなったが、アフター会議は重要である。コロナ後に再開されることを願う。

第 3 分科会では、夏休み前に 1～2 度のミーティングを持ち、4 月に出てきたトピックを踏まえながら当該年度の研究テーマを探るようにしていた。ただし参加者はみな、力を注ぐべき現場を持つ教員である。また研究部に集まる方は、各専門部はもちろん、教科教育の研究会など、高体連研究部以外にさまざまな活動をされている方が多く、研究部に多くの時間と労力を割くことはできない。そこで第 3 分科会では、無理のない範囲で小さな事例を集めることを方針に掲げ、研究を進めるようにしていた。いまの言葉で言うなら「持続可能な研究活動」である。一つひとつの実践が、多くの方々の経験や知恵を集めた「結論」であり、それらを整理して発信することが重要であると考えた。2010 年度紀要の第 3 分科会報告「高体連の競技会－特に施設利用と審判確保をめぐって」を一部転載する。当時の状況を知ることができる資料である。

「高体連の競技会－特に施設利用と審判確保をめぐって」

東京都高体連　研究部　第三分科会　代表　サッカー専門部　筑波大学附属高等学校　中塚義実
アンケート担当　　少林寺拳法専門部　帝京高等学校　工藤慶之
事例報告　　男子体操競技専門部　高輪高等学校　三宅　泉
事例報告　　スケート専門部　法政大学高等学校　余宮　賢

Ⅰ．はじめに－本年度の取り組みの背景

ⅰ.第 3 分科会の研究活動の経緯（2006～2009）

第 3 分科会の組織的な研究活動は、2006 年度にはじまった。「部活動の活性化」につながるような、各専門部や各学校のさまざまな取り組みを収集することで「基礎的研究」を試みたのである。研究部のメンバーはそれぞれ現場を持ち、大規模なプロジェクト研究に取り組むだけの余裕がなかなか持てない。そこで小さな事例を数多く収集することにしたのだが、個々の事例は学校や専門部の枠を超えた財産となり、指導現場の参考になるものとなった。

2009 年度も継続研究を予定していたが、年度当初からインフルエンザ問題が各学校・各専門部を悩ませたことから、「新型インフルエンザと高体連の競技会」と題する調査研究に取り組むこととした。質問紙調査を実施して数字で全体像を把握するとともに、各専門部や各学校の事例を収集し、このトピックに対して質と量の両面から明らかにしようと試みた。

この手法、すなわち、質問紙調査を行って全体を把握しつつ、個々の事例を組み合わせて現場の様子を反映させる方法は、2010 年度の研究にも活かされることとなった。

＜東京都高体連研究部　第 3 分科会研究テーマと概要（2006～2009）＞

2006 年度　…　部活動の活性化に関する基礎的研究①
- ・明大中野高校－生徒会によるクラブ員募集
- ・足立新田高校－学校改革と連動した部活動の活性化
- ・陸上競技専門部－高体連主催「競技会」の実態とその意義
- ・ハンドボール専門部－「教育研修大会」
- ・ホッケー専門部「春と秋のプレ大会」

2007 年度　…　部活動の活性化に関する基礎的研究②
- ・足立東高校－学校がよくなれば部活動も活性化する
- ・筑波大学附属高校－「定期戦」が部活動の活性化に貢献する
- ・ラグビー専門部－「10 人制大会」と「合同チーム」の取り組み
- ・アメリカンフットボール専門部－普及のための「配慮チーム制度」の取り組み

2008 年度　…　部活動の活性化に関する基礎的研究③
- ・少林寺拳法専門部と帝京高校少林寺拳法部
- ・アーチェリー専門部と淑徳高校アーチェリー部

2009 年度　…　新型インフルエンザと高体連の競技会－現場で何が起きたのか
- ・質問紙調査

ⅱ．本年度（2010）の研究活動の経緯

2 年任期の最終年度となる本年度の研究は、まず互いの情報交換から始まった。4 月 27 日と 7 月 6 日のミーティングでは、参加者がそれぞれの専門部で抱える「活性化」にまつわる話題を出し合った。

7 月 6 日の第 2 回ミーティングでは、自由討議から、各専門部のさまざまな課題が浮き彫りになった。

＜東京都高体連研究部　第 3 分科会ミーティング（7 月 6 日）報告（抜粋）＞

1. 各専門部・各学校のトピック（自己紹介を兼ねて）

2. 自由討議

4 月以降のできごとを中心に、各専門部や各学校で起きたことを紹介し合い、自由に意見交換した。

出てきた話題は、おおむね次の通り。

◆施設の問題

・体操競技では、体育館を借りるだけでなく、使用する器具をリースする必要がある。そのため大きな費用がかかる。また公営体育館もなかなか借りられない厳しさがある。今期はある大学の施設を借りることができたが、ギャラリーがなく、競技を見られない。施設確保は大きな問題。

・スケートは、リンクそのものが少なく、一般利用もあって、高体連や高校の部活動で使用できる時間帯が、平日の遅い時間に限定されてしまう。費用負担を含め大きな問題。

・ラグビーのできる試合会場が都内に少ない。隣県の会場を借りて大会を行うことも考えている。

・サッカーの試合を学校の土のグラウンドで計画すると、雨天の場合、中止にせざるを得ない（東京都に特有の問題か）。そのため人工芝グラウンドでの試合を増やそうとしているが、不足している。少年から社会人まで、あらゆる層がグラウンドを求めている。都内では絶対数が不足している。

・バスケットボールのインターハイ予選は、最後は駒沢の体育館で行い、大いに盛り上がった。

◆顧問の異動

・現勤務校では、委員をやっている専門種目とは異なる部の顧問についている。前任校の部は廃部寸前。

・都立では異動が頻繁になっている。また、以前のように、継続性を考慮した人事異動が為されない場合も多々あり、顧問の継続性がない。廃部の危機。

◆男女共学化や中高一貫化による影響＝従来あった部活動が受け皿とはなりにくいことがある

・男子の部活動しかないところに女子が入学してきた場合、女子の受け皿がなく、女子は文化部に流れる傾向にある。

・中高一貫化にともない、中学から取り組めば高校につながる。逆に高校にしかない部は廃れていく。

◆勉強とのバランス

・受験を意識して 3 年生が早期に退部する。どこまで続けられるかが大きな課題。

・夏休みは早朝練習で勉強時間を確保する。6 月末から 1 ヶ月の完全オフをとる。顧問教諭による補習も行う。こうして受験実績を上げることによって、部員数も増えてきた。

◆合同チームの可能性

・単独校では成り立たないが、やってみたい生徒は何人かいる。スケートでも合同チームへの取り組みを考えていきたい。

◆国体の影響

・東京国体へ向けて、ある競技の強化指定校となり、今年は年間 1,700 万円もの強化費が入る。しかしながら、これをどうやって消化していくのか？　当該生徒の学校生活は？　疑問が多い。

・東京武道館の改修にともない、会場確保が今後どうなるか心配。

この議論を受けて、本年度の研究課題を「高体連の競技会ー特に施設利用をめぐって（仮題）」とし、第 3 分科会メンバーに「夏休みの宿題」を課し、それをまとめる形で研究を進めることとした。

「夏休みの宿題」は、「インターハイの代表を選出するにあたり、競技会の開催・運営面（会場確保、審判や運営スタッフの確保、日程や時程、経費の問題など）でどのような苦労があったのかをまず出し合う。特定のフォーマットは設けない。各専門部なりのまとめ方で作成し、夏休み中にメーリングリストにて流す」というもので、「出てきたものを集約し、10 月に集まって議論」することとした。

なお、この日の議論の中で、「ここに出てきたさまざまな問題は、中・長期的に取り組み、全国研究大会の第 3 分科会、または課題研究として発表できるところまで持っていく。研究のための研究に終わるのでなく、教育委員会や行政に働き

かけられるようなものにしていきたい」との方向性も示唆された。

「夏休みの宿題」を集めるのは大変であったが、10 月 19 日のミーティングでは、提出されたものをもとに内容の濃い議論が為された。

＜東京都高体連研究部　第 3 分科会ミーティング（10 月 19 日）報告（抜粋）＞

1. 各専門部から－「夏休みの宿題」をもとに報告

①サッカー（資料あり）、②ラグビー（資料あり）、③アメリカンフットボール（資料あり）、④スケート：アイスホッケー（資料あり）、⑤弓道（資料あり）、⑥剣道（口頭のみ）、⑦少林寺拳法（口頭のみ）、⑧体操競技（資料あり）、⑨なぎなた（資料あり）、⑩アーチェリー（資料あり）、⑪ソフトテニス（口頭のみ）、⑫男子バスケ（口頭のみ）

2. 本年度のまとめの方向性（意見交換）

・「施設の利用」とともに「審判の確保」が、いくつかの専門部で大きな課題として指摘された。

＜施設利用の問題＞

・試合会場として、学校を利用できる専門部と、学校外の施設に依存せざるを得ない専門部で大きな違いがある。それは日常の活動においても同様（例：アーチェリー部の普段の活動で、公式戦と同じ 90m で練習できるところは、大学生と合同練習できる大学の附属学校以外にはほとんどない）。

・競技レベルの向上に対応して施設のレベルも上げていかねばならず、経費がかかる（例：体操競技）等

＜審判確保の問題＞

・審判に相当高度なスキルが求められる競技がある（採点競技や剣道など）。専門的に取り組んできた人でないと審判はできにくく、できる人の負担が過重になる。競技会運営には裏方仕事が不可欠。しかしそのため、自分が顧問をする部の試合に立ち会うことができない。これでいいのだろうか？

・審判養成が進んでいる専門部では逆に、高体連以外の競技会に、審判資格を持つ高校教員が割り当てられ、生徒の活動に関われなくなっている。 等

3. 今後の進め方

「施設」と「審判」に特化して、「高体連の競技会」の事情を把握し、課題を抽出する。そのための簡単なアンケートを、都高体連研究部員対象に実施。11 月下旬までに回収。工藤氏が準備。

調査結果を取りまとめて全体的な傾向を把握するとともに、前回・今回と出てきた各専門部の抱える具体的な課題や解決策を出し合って本年度のまとめとする。

こうして本年度の第 3 分科会の研究の方向性が定まり、本報告に至るのである。

アンケートにご協力くださった研究部員の皆さん、「夏休みの宿題」に真摯に取り組み、互いに問題を共有しようと積極的に議論に参加してくださった第 3 分科会の皆さん、とりわけアンケートの集計等にご尽力いただいた工藤氏には、心より御礼を申し上げたい。（文責：中塚義実）

2011 年度より、第 3 分科会代表を工藤慶之（帝京／少林寺拳法）に引き継いだ。その年度は「各専門部の取り組みから見る部活動の活性化－国体に向けての取り組みを中心に」、2012 年度は「部活動の入部動機に関する一考察－高校生のアンケートから見えたこと」の報告がある。2013 年度は東京都高体連研究大会の 10 周年を機に、いずれの分科会も過去の取り組みをレビューして次につなげる機会とした。

しかしながら 2014 年度の研究紀要には、「今年度の第 3 分科会は、それぞれの研究部員の校務の多忙により、4 月の総会後に行ったミーティング以外の活動は行えなかった」と記されている。そしてこれ以降、分科会としての会合は開催されていない。2017 年度からは柳澤左門（都立日本橋／ボート）が第 3 分科会の代表を務めるが、第 3 分科会の会合は開かれないままコロナ禍を迎えた。

他の分科会はどうだろう。第 2 分科会では 2005～06 年度の紙上発表「身近にある治療院」に続き、2007～16 年度の 10 年間、「全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から」と題する紙上発表を行った。しかし 2016 年度を最後に分科会としての取り組みは為されていない。

第 1 分科会では 2009 年度、奥正克（都立つばさ総合／ハンドボール）を中心に、征矢範子（筑波大学附属／陸上競技）、井口成明（東京大学教育学部附属／水泳）の 3 名の勉強会のかたちで分科会活動が為された。その成果は同年度の紀要に「速く強い下肢運動のためにー身体バランスと下肢運動メカニズム」として報告されている。翌 2010 年度は「投げの動作」に取り組み、研究紀要に報告が掲載されたが、「昨年度は（中略）3 人で分科会を開き、筑波大の阿江教授へのインタビューを行うなどしていたが、今年度は校務を言い訳にした私の怠慢で、そういった会をもつことなく、今回の発表を迎えてしまったことを深く反省している」の記載もある。2011 年度以降は各専門部からの報告が中心となり、分科会としての活動はほとんど為されていない。

東京都高体連研究部委員長は、2015 年度に嶋崎雅規から塩田伸隆（都立松が谷／空手）に、そして 2019 年度に田中康之（都立立川／サッカー）に引き継がれた。私は 2020 年度末まで副委員長として常任委員会に出席していたが、第 3 分科会代表を引き継いだ 2011 年度以降、東京都のことは次世代の方々に委ねるようにしていた。私が力を注ぐべきは全国高体連研究部活性化委員会である。東京都の常任委員会で全国の動向を紹介しつつ、東京都には全国をリードする組織であってほしいと強く願いながら見守っていた。

このような立場を意識してはいたが、実際は常任委員会をリードする発言を多くしていたかもしれない。「今年度の東京都研究大会の内容は？」「講演のテーマと演者は？」「課題研究には取り組まないのか？」「オリパラ教育の担い手として何ができるか？」などについて議論するのだが、発言者は少なく、私の提案がそのまま採用されることが多かったと記憶している。東京都高体連研究部のメンバーはいい人ばかりだが、指示を待つばかりで、ひと昔前の“勢い”や“熱さ”は感じられなくなっていた。

そしてコロナ禍に突入する。

Ⅴ．おわりにー「思い」は受け継がれるのか

2019 年度の課題研究「運動部活動が育むものとは何かー部活動の存在意義についての東京都の調査研究」は、久しぶりに“勢い”や“熱さ”が感じられる機会であった。タイムリーかつ今後につながる内容である。しかし研究の過程を振り返ると、ワンチームで取り組めたとは言い難い。また、東京オリンピック・パラリンピックのホストシティの研究部として「オリパラ教育」に積極的にかかわることが確認されているにもかかわらず、一向に広がらない。

新型コロナのパンデミックは丸 2 年続き、いまだ収束にはほど遠い状況である。この原稿を書いている最中にも 2021 年度の研究大会と委員会の中止連絡があった。オンライン会議も為されないようである。リーダー不在で指示を待つのみ。いったいどうなってしまったのだろう。

私たちの日常生活は一変し、部活動改革は思わぬ形で進行した。いままで放置していた課題が浮き彫りになるとともに、新たな可能性もみえてきた。コロナ後は、以前のすがたに戻すのではなく、続けるべきことと改めるべきことを見きわめ、新たな時代に向き合わねばならない。部活動改革ももちろん同様である。

そういう意味で、いまこそチャンス到来である！

高体連研究部との約 20 年のかかわりの「記録」と「思い」を述べさせていただいた。ここまで読んでいただいて、どのようにお感じになっただろう。「中塚さんの学校だから／中塚さんだからできるんでしょ」と思われた方は、壁にぶち当たったときに「できない理由」を探すタイプの方なのだろう。長い目と広い視野で全体を把握したうえで、目の前にあることに全力を尽くすのみである。

伝えたいことはまだまだあるが、口うるさいおやじになりそうなのでこのあたりでおしまいにしたい。

が、最後に一つだけ、お詫びと、今後へ向けての教訓を述べさせていただきたい。2020 年 1 月末に、個人情報を含む USB メモリ等を入れたカバンが盗難にあい紛失する事件があった。2 月の東京都研究大会で奥秋將史会長から本件について言及があり、個人情報の管理等について厳しい指導があったのを記憶されている方もおられるだろう。本件は私の事案である。個人情報を USB メモリに入れたまま学外に持ち出すの

は厳禁だし、貴重品が入ったカバンを網棚に乗せたまま電車で眠る危機意識の低さは論外である。取り返しのつかない不始末であり、学内外の多くの方々に不快な思いとご迷惑をおかけした。改めて、心よりお詫び申し上げます。

新型コロナのパンデミックは、このすぐあとに到来した。社会の大変革の中で、自分自身の働き方を見直しているところである。「頼まれたら断らない」「おもしろそうなことに首を突っ込む」習性は変わらないし大事にしていきたいが、一つひとつのことに対してもっと慎重に、もっとていねいに向き合わなくてはならない。いくら実績を上げたとしても、一つの不始末で台無しである。信用・信頼は、築き上げるには時間がかかるが、失うのは一瞬である。

次代の皆さんには、オープンマインドとポジティブシンキングを持って、もっともっとやってほしい。と同時に、足もとをすくわれることのないように、当たり前のことをさりげなく、地道に進めてほしい。

東京都高体連研究部のまずますの発展を心より願う。

＜注一覧＞

注１）喜熨斗氏は都立高校に籍を置きながら東京大学大学院で学んだのち転職しＪリーグでトップチームのコーチを歴任。名古屋グランパス時代に現セルビア代表監督のドラガン・ストイコビッチとのつながりが生まれ、2015 年には中国スーパーリーグへ。2021 年からセルビア代表コーチを務める。

注２）小沢氏は 2004 年度末で筑波大学附属駒場中高を離れ、北海道教育大学、東海大学を経て、2017 年度より静岡産業大学スポーツ科学部開設に尽力する。2008 年度の第 5 回研究大会では「ジュニア期のスポーツライフマネジメントー競技力向上は生活習慣の立て直しから」の講演をしていただいた。

注３）いまでは全国に広がるユースサッカーリーグのモデルであり、文京区・豊島区の高校サッカー部とクラブユースで始まった。中塚は 1996～2014 年度まで初代チェアマンを務めた。拙稿「補欠ゼロ、引退なし、自主運営のサッカーリーグ」『運動部活動の理論と実践』、大修館書店、2016 などを参照されたい。

注４）前身はサッカーの指導者・研究者の勉強会「社・心グループ」。1993 年Ｊリーグ開幕、2002 年 FIFA ワールドカップ開催など、サッカーを取り巻く環境が激変する中、1997 年度より「サロン 2002」と改称。「人と情報の交流の場」として開かれる月例サロンは 2022 年 1 月で通算 303 回を数える。2014 年度には特定非営利活動法人となり現在に至る。理事長は中塚。https://www.salon2002.net

注５）この調査は JFA 科学研究委員会の事業であり、全国高体連主催の全国高校総体サッカー競技および日本クラブユースサッカー連盟（JCY）主催の日本クラブユース（U-18）選手権大会の出場選手・指導者を対象に 5 年間実施した。調査結果は各組織の機関誌等で報告、高体連加盟校には 1992 年 2 月発行の『’92 高校サッカー年鑑』から『’96 高校サッカー年鑑』まで、毎年 4～6 ページにわたり「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」の中で紹介した。この調査の企画・実施・集計・報告に携わったことから 1997～2007 年度には JCY 理事を務めることとなり、同連盟の科学研究委員長として飲水タイム導入や、学校と地域クラブ・Ｊクラブの連携調整にあたった。

注６）機関誌 JFAnews「ユース年代のサッカーはいま」は以下の各号に掲載されている。

第 1 回　ユース年代のサッカーの発展過程と今日の状況　1997 年 6 月号、No.156

第 2 回　Ｊリーグのユース年代への影響①ープロという目標ができた、同 7 月号、No..157

第 3 回　Ｊリーグのユース年代への影響②ーみるスポーツとしてのサッカーができた、同 8 月号、No..158

第 4 回　J リーグのユース年代への影響③ー新しいサッカーの場ができた、同 10 月号、No..160
第 5 回　ユース年代のサッカーの現状、同 11 月号、No.161
第 6 回　ユースサッカーの改革のために、同 12 月号、No.162
第 7 回　ユースサッカーにリーグ戦を、1998 年 1 月号、No.163
最終回　これからのユースサッカー、同 3 月号、No.165

注 7）TFA フットサル委員会では全国に先駆け、U-18 年代のフットサル大会を 2001 年度に開始した。JFA の支援を得てこの取り組みは全国に紹介され、各地域で U-18 フットサルが取り組まれるようになり、いまでは JFA 主催の全国大会も行われている。学校とクラブが融合するフットサルの大会は、運動部活動やユース年代のスポーツのあり方の先駆的モデルであると言えるだろう。2021 年 3 月には NPO サロン 2002 主催で「東京都における U-18 フットサルの 20 年 ―過去・現在・そして未来に向けて」が開かれた。同法人 HP のアーカイブに報告書が掲載されている。

注 8）ただし 2006 年 1 月の香川大会では移動の機中で体調を崩し、翌日は会場でなく高松赤十字病院へ向かい、インフルエンザと診断されそのまま帰京せざるを得なかった。ご迷惑をおかけしました。

東京都高等学校体育連盟研究大会　講演一覧（第1回～第18回）

回	年度		演　題	演者	演者所属
1	2004	平成16	アンチドーピング ー健康とフェアプレーを守るために	野田晴彦	（財）日本陸上競技連盟 医事委員
2	2005	平成17	スポーツ栄養の基礎とアスリートのための正しいサプリメント摂取	大畑好美	（財）日本陸上競技連盟 指導者育成委員 管理栄養士
3	2006	平成18	スポーツから救急救命を考える ー勝利の先に救い・守る生命がある	小峯　力	日本ライフセービング協会理事長
4	2007	平成19	アスリートボディの取扱説明書	手塚一志	パフォーマンス・コーディネーター
5	2008	平成20	ジュニア期のスポーツライフマネジメント ー競技力向上は生活習慣の立て直しから	小澤治夫	東海大学　体育学部教授
6	2009	平成21	スポーツ・運動指導でのリスクマネジメント	谷塚哲	REGISTA有限責任事業組合代表 スポーツ法律事務所・谷塚行政書士事務所代表
7	2010	平成22	部活動指導者に求められる資質	柴崎栄一	(財)全国高体連顧問弁護士
8	2011	平成23	意識と知識を持たせた中学・高校野球の指導法	小林昭則	帝京高校教諭 元千葉ロッテマリーンズ投手
9	2012	平成24	努力は裏切らないー夢と人生	宇津木妙子	東京国際大学女子ソフトボール部総監督 元ソフトボール日本代表監督
10	2013	平成25	ー流の「スポーツマンのこころ」 ースポーツを通じての人間的成長のために	高橋正紀	岐阜経済大学経営学部教授
11	2014	平成26	トップアスリートの心理サポート	秋葉茂季	国立スポーツ科学センター
12	2015	平成27	オリンピックの誕生とクーベルタンの闘い	和田浩一	フェリス女学院大学
13	2016	平成28	平和運動としてのオリンピック	枡本直文	首都大学東京オープンユニバーシティ特任教授 NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事
14	2017	平成29	オリンピックと嘉納治五郎	真田久	筑波大学体育専門学群長 筑波大学ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ教育ﾌﾟﾗｯﾄﾌｫｰﾑ事務局長
15	2018	平成30	オリンピックに向けたグローバル人材の育成 ー生徒たちに伝えたいおもてなしの心	江上いずみ	筑波大学客員教授 Global Manner Springs代表
16	2019	平成31/ 令和元	“Sport”という文化～SportとSportsの違いから （社会の中の運動部活動ースポーツ教育の原点を考える）	菊　幸一	筑波大学体育系教授
17	2020	令和2	中止	ー	ー
18	2021	令和3	中止	ー	ー

東京都高等学校体育連盟研究大会　研究発表一覧（第1回～第18回）

回	年度		分科会	発表テーマ（専門部）	発表者（勤務校）
1	2004	平成16	1	高校の部活動での競技力の向上ー東京都立野津田高校ボクシング部での実践（ボクシング）	山崎哲男（都立南平）
			1	サーブ動作における肩筋肉の活用と練習法についての若干の考察（テニス）	家弓明丈（都立小金井工業）
			2	空手道競技の安全対策についてー東京都空手道専門部の取り組み（空手道）	山下和秀（目黒学院）
			3	フェンシング競技における部員確保とその問題点（フェンシング）	道山京子（藤村女子）
			3	東京都におけるユースサッカーリーグの実践報告 ーDUOリーグの創設（1996）から公認リーグ準備過程（2004）まで（サッカー）	中塚義実（筑波大学附属）
2	2005	平成17	1	練習の効率化ー北園高校男子バレーボール部の試み（男子バレーボール）	荒川智行（都立北園）
			3	剣道人口減少、対策後の10年（剣道）	柳清司（都立足立東）
			2	★身近に在るスポーツ傷害治療院【紙上発表】	山下和秀（目黒学院）
3	2006	平成18	1	藤村女子高等学校バスケットボール部強化活動報告（女子バスケットボール）	横森将史（藤村女子）
			1	学校別の部活動に関するー考察ー私が経験した3校の事例から（サッカー）	浦野浩一（都立北園）
			3	★部活動の活性化に関する基礎的研究Ⅰ ー各学校における部員募集の試みと、各専門部における独自の競技会開催（事例紹介）	中塚義実（筑波大学附属）
			2	★身近に在るスポーツ傷害治療院Ⅱ【紙上発表】	山下和秀（目黒学院）
4	2007	平成19	1	ラグビーー全東京高校代表強化の取り組みー国体優勝を目指して（ラグビー）	諫見雅隆（都立青山）
			1	女子柔道の強化（柔道）	木曽博（帝京）
			3	★部活動の活性化に関する基礎的研究Ⅱー各学校・各専門部の取り組みより（事例紹介） 学校①都立足立東高等学校ー学校がよくなれば部活動も活性化する 学校②「定期戦」が部活動の活性化に貢献する 専門部①ラグビー専門部ー「10人制大会」と「合同チーム」の取り組み 専門部②アメリカンフットボール専門部ー普及のための「配慮チーム制度」の取り組み	中塚義実（筑波大学附属） 柳清司（都立足立東） 嶋崎雅規（帝京） 富岡雅（足立学園）
			2	★全国高校総体都参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	手塚智幸（帝京）
5	2008	平成20	特別	調査・研究活動の推進を目指して	中川恵（都高体連会長）
			1	弓道における競技力の向上ー弓道の特殊性（弓道）	乃美弘樹（都立晴海総合）
			1	国体予選を突破するための方策（ソフトボール）	安原正樹（日出）
			3	★部活動の活性化に関する基礎的研究Ⅲ	中塚義実（筑波大学附属）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	手塚智幸（帝京）
6	2009	平成21	課題	複数校合同部活動の成果と課題に関する研究（ラグビー）	嶋崎雅規（帝京）
			特別	陸上競技の短距離におけるスタート練習のー考察から（陸上競技）	澤海富保（都高体連副会長）
			1	★速く強い下肢運動のためにー身体バランスと下肢運動メカニズム	征矢範子（筑波大学附属）
			3	★新型インフルエンザと高体連の競技会ー現場で何が起きたのか	中塚義実（筑波大学附属）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	塩田伸隆（都立松が谷）
7	2010	平成22	1	高校生短距離競技者のレースパターンについて（陸上競技）	黒木義郎（巣鴨） 黒須崇仁（江戸川女子）
			1	★投げの動作	奥正克（都立つばさ総合）
			3	★高体連の競技会ー特に施設利用と審判確保をめぐって 事例報告：男子体操競技専門部 事例報告：スケート専門部	中塚義実（筑波大学附属） 工藤慶之（帝京） 三宅泉（高輪） 余宮賢（法政大学高校）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	塩田伸隆（都立松が谷）
8	2011	平成23	1	サービスを入れる（テニス）	熊澤弘安（都立府中工業）
			1	陸上競技専門部研究班の取り組みについて ー東京国体に向けての強化サポート（陸上競技）	黒木義郎（巣鴨） 黒須崇仁（江戸川女子）
			3	★各専門部の取り組みから見る部活動の活性化 ー国体へ向けての取り組みを中心に 事例報告：男子バスケットボール専門部 事例報告：アーチェリー専門部 事例報告：相撲専門部	工藤慶之（帝京） 三原学（安田学園） 糸園容子（都立松が谷） 満留久摩（都立足立新田）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	塩田伸隆（都立松が谷）
9	2012	平成24	1	陸上競技専門部研究班の取り組みについて ー東京国体に向けての強化サポート・跳躍競技をテーマに（陸上競技）	黒須崇仁（江戸川女子）
			2	空手道競技規定・審判規定の変更に伴う審判の在り方及び今後の課題について ー空手道競技における安全性の確保という観点から（空手道）	塩田伸隆（都立松が谷）
			3	部活動の入部動機に関するー考察ー高校生のアンケートから見えたもの（剣道）	井谷亨（都立三田）
10	2013	平成25	1	★10年間を振り返る	奥正克（都立つばさ総合）
			2	★「健康と安全」の歩みー10年を振り返る	塩田伸隆（都立松が谷）
			3	★過去から現在、そして未来へ ー過去の活動を振り返ることで現在を見つめ直し将来への展望につなげる	工藤慶之（帝京）
11	2014	平成26	1	全国高校サッカー選手権大会分析の取り組み（サッカー）	田中康之（都立立川）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	塩田伸隆（都立松が谷）
			3	★学校や専門部の取り組みから見る分科会を超えた調査研究①	工藤慶之（帝京）
12	2015	平成27	1	地区レベルでのサッカーのテクニカルビデオについて（サッカー）	沢辺治史（都立片倉）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	武田右子（青山学院）
			3	高校生が運営する競技会の可能性（少林寺拳法）	工藤慶之（帝京）
13	2016	平成28	1	城西大城西高校の強化についてー短距離ブロックを中心に（陸上競技）	黒木義郎（巣鴨）
			2	★全国高校総体参加選手対象アンケート調査の結果から【紙上発表】	田中玄太（日大豊山）
			3	新たな歴史が生まれたー空手道2016（空手道）	手塚智幸（帝京）
14	2017	平成29	1	理想的な疾走フォームを探るー地元東京から東京五輪出場を目指して（陸上競技）	黒木義郎（巣鴨）
			2	学校水泳で注意すべきこと（水泳）	井口成明（東京大学教育学部附属中等教育）
15	2018	平成30	1	東京都の発展と強化ー国体からオリンピックへ（ボート）	柳澤左門（都立日本橋）
			課題	★運動部活動が育むものとは何かー部活動の存在意義についての調査	鞠子智秋（都立清瀬）
16	2019	平成31・令和元	課題	★運動部活動が育むものとは何かー部活動の存在意義についての東京都の調査研究	鞠子智秋（都立清瀬）
			研究報告	★東京都高体連研究部　滋賀大会に向けた取り組み	東京都高体連研究部
			研究報告	部活動の存在意義についての東京都の調査研究、統計分析	田中康之（都立立川） 木村元彦（専修大学）
17	2020	令和2	（課題）	百聞は一見に如かず ー自己イメージとICTを利用したパフォーマンス認識のギャップ修正について（ソフトボール）	佐藤祐輔（目黒日本大学高等学校）
			（課題）	高校サッカー地域リーグ（ユースリーグ）からリーグ戦文化を考える（サッカー）	田中隆晴（都立片倉）
			2	★コロナ禍の部活動ー工夫と変化の調査	堀越和彦（日本学園） 柳澤左門（都立日本橋）
18	2021	令和3	特別総評	東京都高体連研究部の活性化のために ー高体連研究部との20年のかかわりの「記録」と「思い」	中塚義実（筑波大学附属）
			情報収集	★コロナ禍の部活動ー工夫と変化の調査	堀越和彦（日本学園）

★は分科会や専門部、またはそれらを越えた共同研究

補足資料：東京都高体連サッカー科学研究会のあゆみ（1995～2005）

2006.4.8.

回数	年	期日	テ ー マ （報告・問題提起者）	共催
第1回	1995	4.21.	体力データからみる強豪校の秘密（小沢治夫）	
第2回		5.26.	生活時間調査からみた各校の現状	
第3回		6.23.	トレーニングと栄養・休養に関する基礎理論（中塚義実・小沢）	
第4回		7.21.	サッカーチームのシステムエンジニアリングー西嶋尚彦理論の伝達講習（小沢・中塚）	
第5回		8.14.	科研メンバーが指導するチームの交流試合／参加チームの体力測定	
第6回		9.22.	各チームの夏の報告	
第7回		10.27.	イタリア・フィットネスコーチ研修会報告（喜熨斗勝史）	
第8回		11.24.	実技：体力トレーニングの理論と実際（小沢）	
第9回		12.22.	実技：東京都高体連科研チームvs高体連第6地区教員チーム	
第10回	1996	1.26.	『1996高校サッカー年鑑』先取り情報ーゲーム分析・ユースサッカー調査・サッカー科学（徳田親信・中塚・小沢）	
第11回		2.23.	第16回サッカー医・科学研究会より（中塚）／トレーニング機器のそろえ方・使い方（小沢）	
第12回		3.8.	スポーツにおける怪我の予防と対策・スポーツテーピング実技研修会（岸田光道）	●
第13回		4.26.	サッカー選手の栄養について（杉本克己）	●
第14回		5.25.	強くなるチームづくりの秘訣ー久留米高校を例にして（山口隆文）	
第15回		6.21.	「サッカー地理学」への誘い（三堀潔貴）	
第16回		7.3	Ｉ年間を6期に分けた指導実践報告ー館高校の例より（角本芳樹）	
第17回		8.14.	今後の方向性についての検討会	
第18回		9.27	ブラジルサッカー研修報告（小金丸浩志）	
第19回		10.25.	Jリーガーを輩出している町田地区の選手育成システム（岸本直也）	●
第20回		11.22.	高校サッカーにリーグ戦をー「DUOリーグ」発足とその背景（中塚）	
第21回		12.22.	実技：東京都高体連科研チームvs東京都の高校生選抜	
第22回	1997	1.24.	高校サッカー選手権得点場面について（徳田）	
第23回		2.21.	小沢治夫の最近の実践から（小沢）	
第24回		3.21.	スカウティングのツボー福生高校vs足立学園戦をめぐって（北原由）	
第25回		4.25.	ユース年代の選手・指導者はいまーJFAnews連載計画（中塚）	
第26回		5.23.	ジュニアユース指導とスポーツ障害（大平直樹）	●
第27回		6.27.	サッカーくじの動向（三堀）／ゲーム分析ー館高校vs福生高校（角本）	
第28回		7.15.	ビデオ鑑賞「スポーツ栄養と水分補給」「フットサル世界選手権決勝：ブラジルvsスペイン」	
第29回		9.26.	サッカー選手と眼（枝川宏）	●
第30回		10.24.	審判からみた文化としてのサッカー（太田潔）	
第31回		11.21.	ユース年代のサッカーを考える（中塚）	
第32回		12.15.	実技：フットサル	
第33回	1998	1.23.	高校サッカー選手権得点場面について（徳田）／タレント発掘の観点からみたサッカー環境とは（中塚）	
第34回		2.27.	学校医のチームドクター化促進計画（小沢）／YMCAにおけるリスクマネジメント（雲走和孝）	
第35回		4.24.	平成10年度高校選抜欧州遠征帯同報告ーヨーロッパ・サッカー見聞録（小沢・三堀）	
第36回		5.22.	サッカーと暑さ対策ーWBGTの活用（小田一之）	●
第37回		7.1.	ワールドカップへ行ってきました！ーフランス大会視察報告（中塚）	
第38回		9.25.	サッカーのゲーム分析（大橋二郎）／地域におけるユースサッカーリーグの実践報告（中塚）	☆
第39回		10.16.	青梅FCの歴史と現状（杉山裕之）	●
第40回		11.20.	筑波大学附属駒場高校サッカー部にみる選手の健康管理（小沢）	
第41回		12.20.	実技：大人vs高校生／DUOリーグ会議	※
第42回	1999	1.22.	ゴールサイドでできるトレーニング（金子博昭）	●
第43回		2.26.	高校サッカー選手権得点場面について（徳田）	
第44回		4.23.	高校サッカー選手に必要な体力は？（小沢）	
第45回		5.28.	グラウンドがなくてもサッカーができるか？ー都心部におけるサッカー部の悩みと工夫（奈蔵清之・青木久典）	
第46回		7.3.	平成11年度高校選抜欧州遠征帯同報告ーヨーロッパサッカーはいま（北原）	
第47回		9.24.	暑い（熱い）夏を振り返る	
第48回		10.22.	学校行事と部活動	
第49回		11.26.	学校行事と部活動②	
第50回		12.19.	DUOリーグ会議	※
第51回	2000	1.21.	保健体育授業報告：スポーツをよむー高校サッカー選手権を観戦して（小沢）	
第52回		3.3.	高校サッカー選手権得点場面について（徳田）	

第53回		4.28.	東京都ユースサッカーリーグ創設へ向けて①ーメインテーマ設定のねらいとDUOリーグの事例報告(中塚)	
第54回		5.26.	青木久典先生・欧州を行くーイングランドへドイツ～スイス(青木)	
第55回		7.7.	過去10年間の選手権得点場面の傾向を探る(徳田)／東京都ユースリーグ創設へ向けて②ー東京協会の動き(中塚)	
第56回		9.21.	高校選手権得点場面の分析ー10年間を振り返って②:夏休みの宿題報告	
第57回		10.20.	高校選手権得点場面の分析③／東京都ユースリーグ創設へ向けて③	
第58回		11.24.	高校選手権得点場面の分析④ー『高校サッカー年鑑』及び「サッカー医科学研究会」へ向けて／東京都ユースリーグ創設へ向けて④	
第59回		12.23.	DUOリーグ会議	※
第60回	2001	1.26.	高校選手権得点場面の分析(徳田)／21世紀のスポーツ界をめぐる動向(小沢)	
第61回		2.23.	DUOリーグ5年間の足跡と展望ー東京都ユースサッカーリーグ創設へ向けて⑤(中塚)	
第62回		4.27.	ユースサッカーは変わるかーDUOリーグのあゆみと東京都ユースリーグの展望及び学校運動部のクラブ化について(中塚)	★
第63回		5.25.	東京都ユースリーグをどうつくるか:ディスカッション	▲
第64回		6.22.	東京都ユースリーグをどうつくるか②ー地域、時期・期間、加盟と参加、運営等	▲
第65回		7.2.	東京都ユースリーグをどうつくるか③ー2001年後期「プレリーグ」のはじめ方:DUOリーグを参考に	▲
第66回		9.21.	東京都ユースリーグをどうつくるか④ー「プレリーグ」準備及び進捗状況	▲
第67回		10.26.	東京都ユースリーグ創設へ向けての動きを追うープレリーグから何が見えるか(中塚)	★▲
第68回		11.28.	ユースリーグの可能性と課題ー2010年を視野に入れて(中塚)	★▲
第69回	2002	1.25.	東京都ユースリーグをどうつくるか⑤ープレリーグ総括・ユースリーグ創設へ向けての「提言」の検討	▲
第70回		2.21.	選手権得点場面の分析(徳田)／高校サッカー80年を振り返って(北原)／東京都ユースリーグをどうつくるか⑥ー提言の検討	▲
第71回		4.26.	2002東京都ユースリーグの現状と課題	▲
第72回		5.24	東京都ユースリーグ公認化へ向けて①ーTFAユースリーグ準備委員会報告等	▲
第73回		7.5.	2002プレリーグから何がみえるかー公認リーグ創設へ向けて②	▲
第74回		9.27.	成城フットボールクラブ設立の経緯(蔵森紀昭)／公認リーグ創設へ向けて③	▲
第75回		11.1.	ユースサッカーにリーグ戦をー底辺からトップまで(中塚)	★▲
第76回		11.29.	公認リーグ創設へ向けて④ー2003年度「プレ上位リーグ」をいかに立ち上げるか	▲
第77回		12.23.	DUOリーグ会議	※
第78回	2003	1.24.	公認リーグ創設へ向けて⑤ー2003年度前期プレリーグ見通し及び後期以降の展開	▲
第79回		2.21.	公認リーグ創設へ向けて⑥ー2003年度前期「PJ(プレ上位)リーグ」代表者会議権抽選会	▲
第80回		4.25.	U-18東京都リーグ2004年度公認化へ向けて①ー「PJリーグ」と「地区リーグ」中間報告①	▲
第81回		5.23.	U-18東京都リーグ2004年度公認化へ向けて②ー「PJリーグ」と「地区リーグ」中間報告②	▲
第82回		6.27.	U-18東京都リーグ2004年度公認化へ向けて③ー後期プレ大会について／2002年W杯は高校生に何を残したか(中塚)	▲
第83回		9.26.	U-18東京都リーグ2004年度公認化へ向けて④ー地区リーグをどう運営するか	▲
第84回		10.24.	競技団体の登録制度を考えるーJFA200万人構想をめぐって(JFA・CHQ)	★▲
第85回		11.21.	U-18東京都リーグ2004年度公認化へ向けて⑤	▲
第86回		12	各種研修会情報提供(会合は開かず)	※
第87回	2004	1.17.	U-18東京都サッカーリーグ拡大準備委員会ー2004年度公認化へ向けて⑥	△▲
第88回		2.19.	U-18東京都サッカーリーグ事務局長会議ー2004年度公認化へ向けて⑦	△▲
第89回		4.23.	U-18東京都各リーグ(未公認)進捗状況報告会	■
第90回		5.21.	U-18東京都各リーグ(未公認)進捗状況報告会／ユースリーグに関する調査の検討①	■
第91回		6.25.	U-18東京都リーグ準備委員会(2005年度準備)報告／ユースリーグに関する調査の検討②	■
第92回		10.1.	ユースリーグについてー東京都と富山県の事例報告／フェンシング専門部より	○
第93回		10.22.	ユースリーグ最新情報	■
第94回		11.27.	サロン2002公開シンポジウム「totoを活かそうー地域スポーツ振興のために」	★
第95回		12.10.	U-18東京都(未公認)リーグ:2004年度活動報告と今後	△
第96回	2005	1.14.	第1回東京都高体連研究大会準備会	○
第97回		3.4.	U-18東京都(未公認)リーグ:2004年度活動報告と今後の展望	△
第98回		4.28.	U-18東京都(未公認)リーグ:2005年度展望	■
第99回		6.24.	オプタのデータをどう読み、活かすか	★
第100回				

★	「サロン2002」(異業種集団)の月例会として開催(詳細は「サロン2002」HP<http://www.salon2002.net>参照
☆	サッカー研究会(大学教官中心の研究会)と共同開催
▲	「東京都高体連ユースリーグ検討委員会」(各地区選出の高体連委員で構成)として開催
△	東京都サッカー協会(TFA)ユースリーグ準備委員会(のー部)として開催
※	DUOリーグ(詳細は「DUOリーグHP<http://duoleague.com>参照)の活動として開催
●	外部講師による講演会
○	東京都高体連研究部第3分科会(部活動の活性化)の活動として開催
■	東京都各地区リーグ情報交換会を兼ねて開催

2021 年度第 2 分科会　健康と安全
コロナ禍の部活動　～工夫と変化の調査：１年後の実態～

堀越 和彦および東京都高体連研究部員

１．はじめに　研究のきっかけと継続の理由

2020 年東京オリンピック・パラリンピックを延期に追い込んだ「新型コロナウィルス」は今なお部活動に大きな影響を与えている。2020 年度の調査結果から 1 年を経過し、更に緊急事態宣言が繰り返される中で、部活動がどのように実践されたのか、その記録をまとめておくことが部活動発展へのヒントになると考えた。2020 年は実施されなかったインターハイ(予選を含む)も 2021 年は実施され、コロナ禍でも 2020 年と 2021 年の状況には変化があると予想され、その違いは何か見つけたい。

２．目的

緊急事態宣言発令は 5 回にも及び部活動ができなかった期間をどのように過ごし、また、どんな進歩・課題があったのか記録し、同様の事態になった場合の対処材料とする。

３．アンケート調査の概要

（１）対　象　：東京都高体連研究部員の教員 39 名（前年 42 名）
　　＊調査対象者所属校：私立 55.3%、都立 39.5%

（２）期　間　：2021 年 12 月

（３）調査方法：Google Forms によるアンケート形式による調査

（４）調査内容：コロナ禍での部活動実態
　　＊なお、前年度質問項目、質問 10.11.13 除いた

（５）分析方法：前年度との実態を比較する。キーワード分析はテキストマイニングを活用。(https://textmining.userlocal.jp/)
　　＊調査期間の社会状況
　　2020 年度調査では緊急事態宣言中と解除後の 2 つのセクションに分けて調査した。今回は緊急事態宣言期間が長く、まん延防止等重点措置も含め活動制限のない期間は少ない。

https://www.tokyo-np.co.jp/article_photo/list?article_id=133401&pid=469688 より
（東京新聞 web）

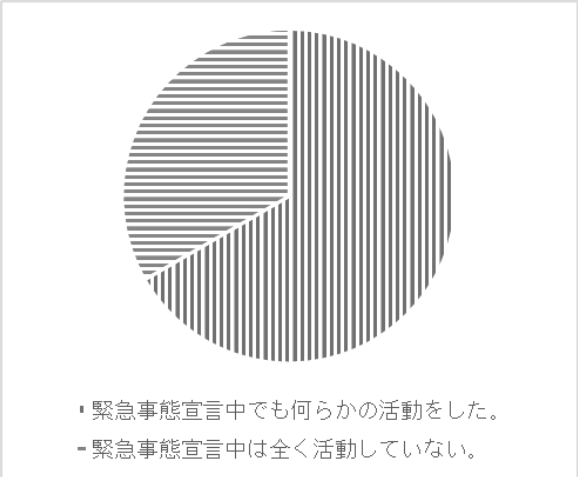
（期間を調べカレンダー自作）

	2020年								2021年							
				1	2	3	4		3	4	5	6	7	8	9
	5	6	7	8	9	10	11	1月	10	11	12	13	14	15	16
	12	13	14	15	16	17	18		17	18	19	20	21	22	23
	19	20	21	22	23	24	25		24	25	26	27	28	29	30
	26	27	28	29	30	31	1		31	1	2	3	4	5	6
	2	3	4	5	6	7	8	2月	7	8	9	10	11	12	13
	9	10	11	12	13	14	15		14	15	16	17	18	19	20
	16	17	18	19	20	21	22		21	22	23	24	25	26	27
	23	24	25	26	27	28	29		28	1	2	3	4	5	6
	1	2	3	4	5	6	7	3月	7	8	9	10	11	12	13
	8	9	10	11	12	13	14		14	15	16	17	18	19	20
	15	16	17	18	19	20	21		21	22	23	24	25	26	27
	22	23	24	25	26	27	28		28	29	30	31	1	2	3
	29	30	31	1	2	3	4		4	5	6	7	8	9	10
	5	6	7	8	9	10	11	4月	11	12	13	14	15	16	17
	12	13	14	15	16	17	18		18	19	20	21	22	23	24
	19	20	21	22	23	24	25		25	26	27	28	29	30	1
	26	27	28	29	30	1	2		2	3	4	5	6	7	8
	3	4	5	6	7	8	9	5月	9	10	11	12	13	14	15
	10	11	12	13	14	15	16		16	17	18	19	20	21	22
	17	18	19	20	21	22	23		23	24	25	26	27	28	29
	24	25	26	27	28	29	30		30	31	1	2	3	4	5
	31	1	2	3	4	5	6	6月	6	7	8	9	10	11	12
	7	8	9	10	11	12	13		13	14	15	16	17	18	19
	14	15	16	17	18	19	20		20	21	22	23	24	25	26
	21	22	23	24	25	26	27		27	28	29	30	1	2	3
	28	29	30	1	2	3	4		4	5	6	7	8	9	10
	5	6	7	8	9	10	11	7月	11	12	13	14	15	16	17
	12	13	14	15	16	17	18		18	19	20	21	22	23	24
	19	20	21	22	23	24	25		25	26	27	28	29	30	31
	26	27	28	29	30	31	1		1	2	3	4	5	6	7
	2	3	4	5	6	7	8	8月	8	9	10	11	12	13	14
	9	10	11	12	13	14	15		15	16	17	18	19	20	21
	16	17	18	19	20	21	22		22	23	24	25	26	27	28
	23	24	25	26	27	28	29		29	30	31	1	2	3	4
	30	31	1	2	3	4	5	9月	5	6	7	8	9	10	11
	6	7	8	9	10	11	12		12	13	14	15	16	17	18
	13	14	15	16	17	18	19		19	20	21	22	23	24	25
	20	21	22	23	24	25	26		26	27	28	29	30	1	2
	27	28	29	30	1	2	3		3	4	5	6	7	8	9
	4	5	6	7	8	9	10	10月	10	11	12	13	14	15	16
	11	12	13	14	15	16	17		17	18	19	20	21	22	23
	18	19	20	21	22	23	24		24	25	26	27	28	29	30
	25	26	27	28	29	30	31		31	1	2	3	4	5	6
	1	2	3	4	5	6	7	11月	7	8	9	10	11	12	13
	8	9	10	11	12	13	14		14	15	16	17	18	19	20
	15	16	17	18	19	20	21		21	22	23	24	25	26	27
	22	23	24	25	26	27	28		28	29	30	1	2	3	4
	29	30	1	2	3	4	5	1	5	6	7	8	9	10	11
	6	7	8	9	10	11	12	2月	12	13	14	15	16	17	18
	13	14	15	16	17	18	19		19	20	21	22	23	24	25
	20	21	22	23	24	25	26		25	26	27	28	29	30	31
	27	28	29	30	31	1	2								

緊急事態宣言期間
まん延防止等重点措置期間

４．アンケート調査結果および考察

質問１　2021 年１月以降は緊急事態宣言が何度か繰り返されました。緊急事態宣言中の部活動の実施についてお答えください。

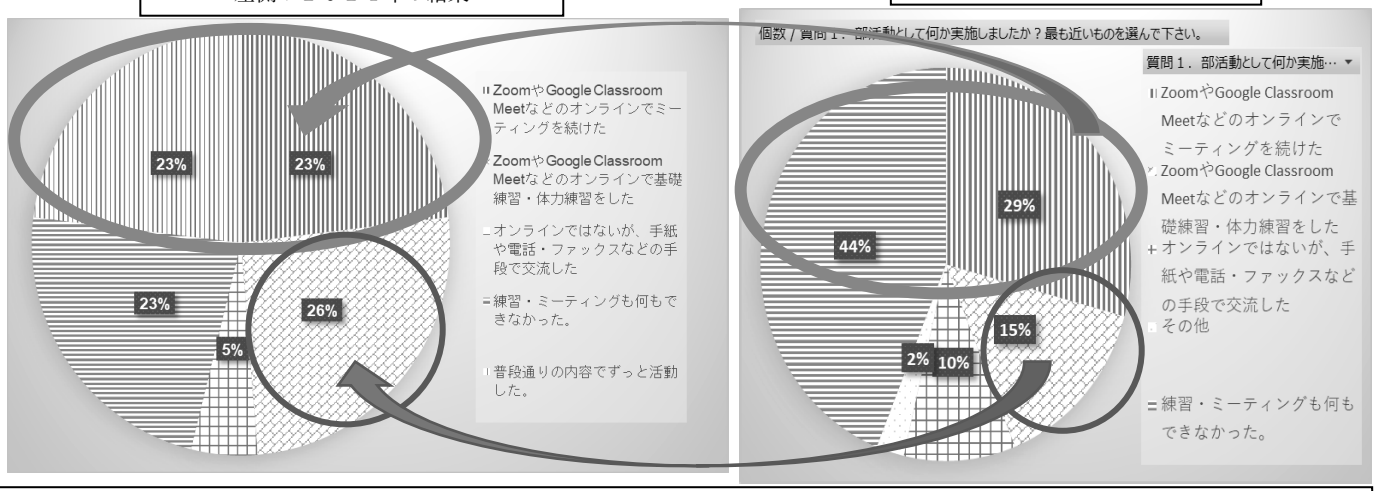


２０２１年は１月から９月まで緊急事態宣言かまん延防止等重点措置の状況下であったため、その状況でも部活を実施したのが６割以上。一方で全く活動できなかった３割は９か月間部活動ができなかったと言える。

質問２　部活動として何を実施しましたか？最も近いものを選んで下さい。

左側；２０２１年の結果

右側：２０２０年の結果

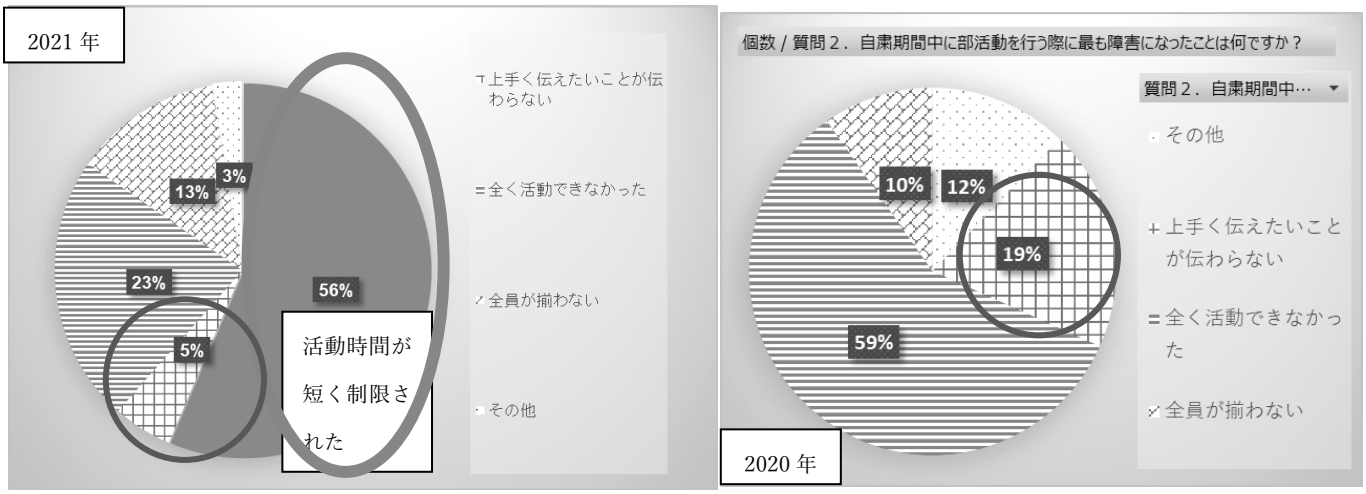


特徴１　2020 年は緊急事態宣言中に「zoom などでオンラインミーティングなどを続けた」のが 29%だったが、2021 年はそれが 23%。2021 年では「普段通りの内容で活動を続けた」23%を含めると 46%が部活動を実践したことがわかる。「練習・ミーティングも何もできなかった」が 44%から 23%に減少している部分とちょうど合致する。

特徴２　「オンラインで基礎練習・体力練習をした」は 15%から 26%へと上がり、先生方が緊急事態宣言中でも何とか工夫して活動が継続されたことを示している。またこの項目を入れて部活動全体で考えると 2020 年は 54%の部活実施率が 2021 年は 77%に上昇している。

質問３　部活動を行う際に最も障害になったことは何ですか？

2021 年



2020 年

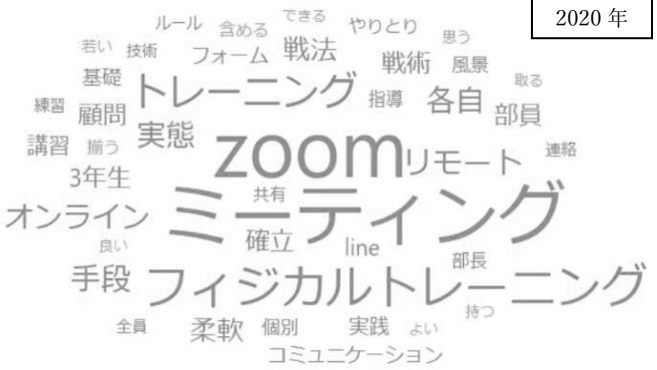
特徴１　選択肢に「活動時間を制限された」を入れたら、ほぼ半分がこれを答え、何らかの活動をしたことを示している。

特徴２　普段の活動を再開したこともあり、「うまく伝えたいことがつたわらない」が大幅に減った。

質問５．自粛期間にやりたかったと思うこと、あるいはあった方がよかったものは何ですか？あれば具体的に記入してください。

2021 年

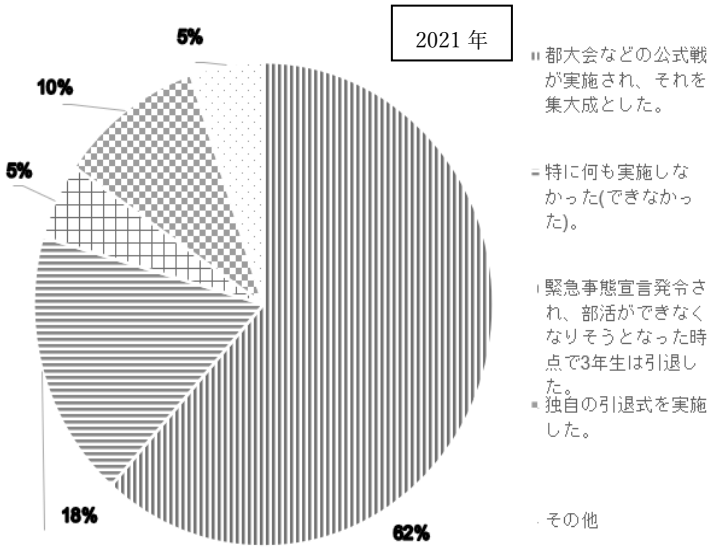
2020 年



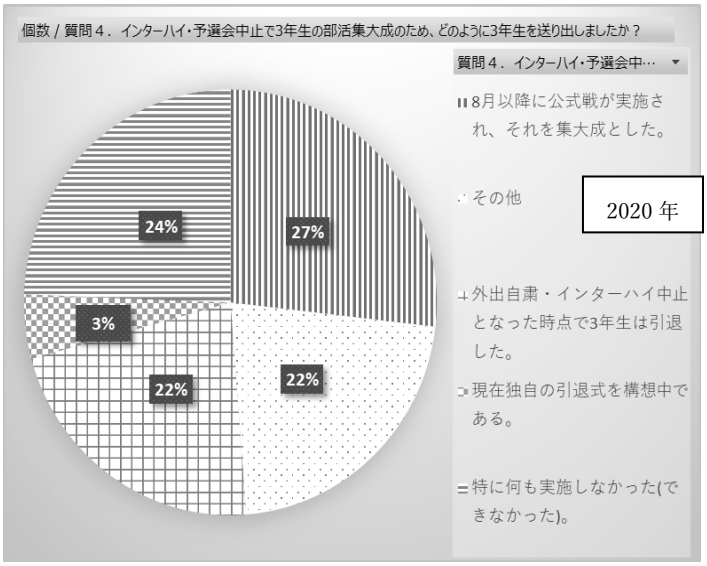
この質問に対して、2020 年の調査では「zoom」や「フィジカルトレーニング」という回答がみられた。2021 年では「なし」という回答は 70%であった。2021 年の自粛期間は長くなかったことや、さらに活動に対する工夫や改善がなされたことを意味する。しかしながら、結果からみられるように約 30%の回答に「zoom」や「フィジカルトレーニング」の回答がみられた。さらに工夫や改善を図る必要があるといえる。また、コロナ禍が重くのしかかり、どう管理しながらやるべきだったのかという苦悩が感じられる。

質問６　2021 年度はインターハイが実施されました。それに伴い、今年は高校 3 年生の部活の集大成ができたと予想されます。それに対する質問です。どのように高校 3 年生を送り出しましたか？

2021 年



2020 年

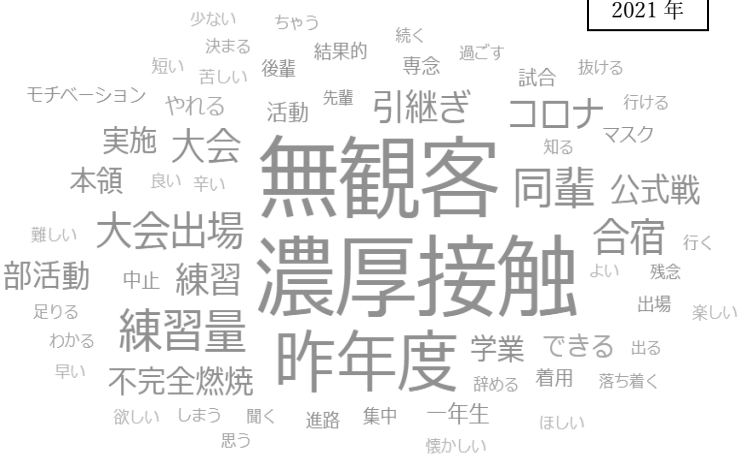


特徴１　緊急事態宣言中でも部活動ができたことで、明らかに引退時期は例年に近づいたと読み取れる。インターハイ(予選を含む)実施に伴い高校 3 年生の集大成は公式戦で終わりが 6 割以上を占め、早期の引退は減った。

特徴２　引退しなくても何らかの独自引退式をするところが増えた。

質問１０．高校３年生から聞いた印象的な生の声を３つまでお答えください。

2021 年

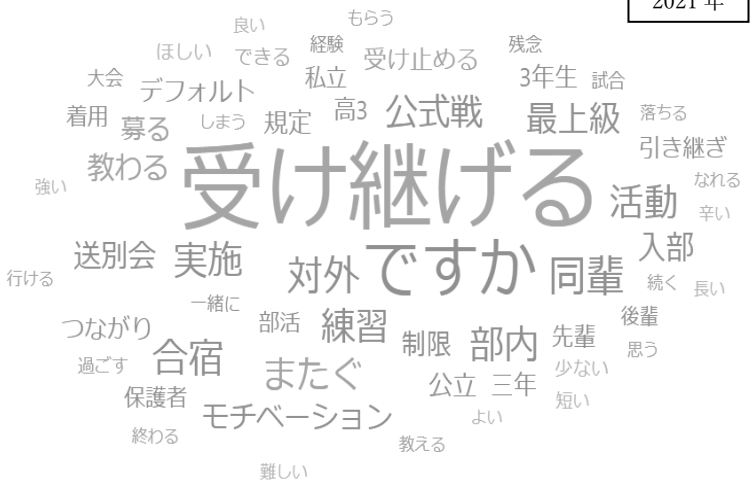


2020 年

特徴　2020 年は大会が実施されないことへの悔しさを表す言葉が多いが、2021 年は大会を実施するために必要な条件や注意すべきことが目立つ。

質問１１．高校２年生から聞いた印象的な生の声を３つまでお答えください。

2021 年

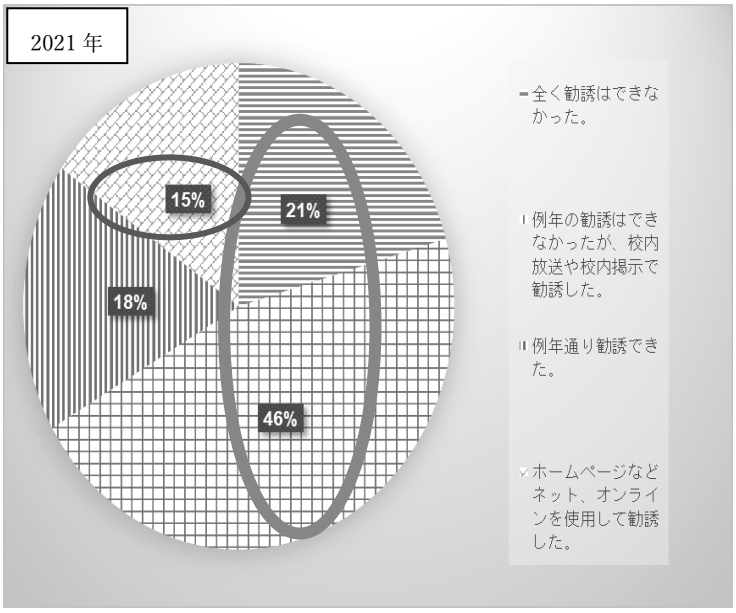


2020 年

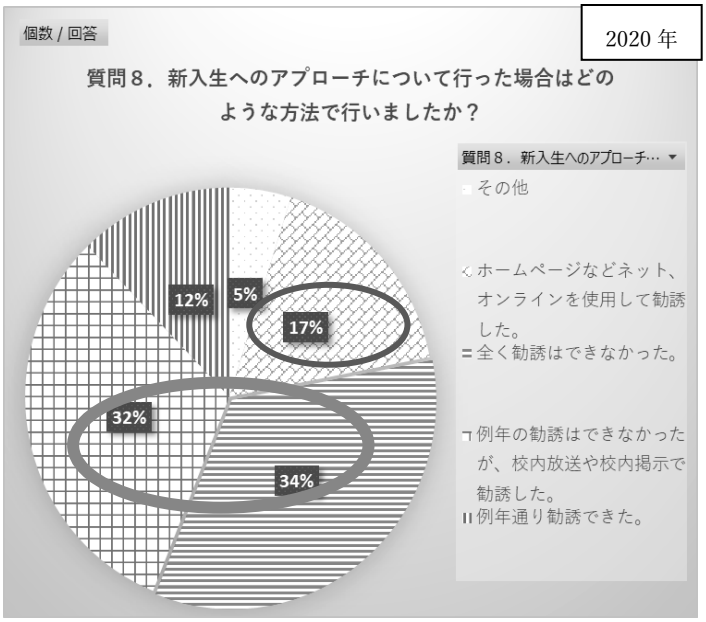
特徴　2020 年突然高校 3 年生が引退した環境から部活動がたとえ短い時間でも先輩から何か吸収して受け継ごうという 2 年生の強い意志が感じられる。

質問１２　新入生へのアプローチについて行った場合はどのような方法で行いましたか？

2021 年



2020 年

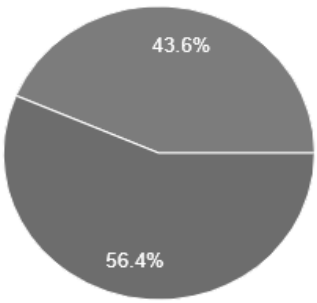


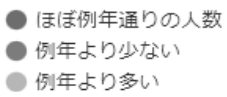
特徴１　「まったく勧誘できなかった」は 10%以上減り、工夫して「校内放送や校内掲示で勧誘」がその分だけ増えた。

特徴２　ホームページやインターネットでの勧誘はコロナにかかわらず行われているようだ。

質問１３　その結果、現在高校1年の部員数は例年と比較してどうですか？

2021 年のみの質問、2020 年調査せず

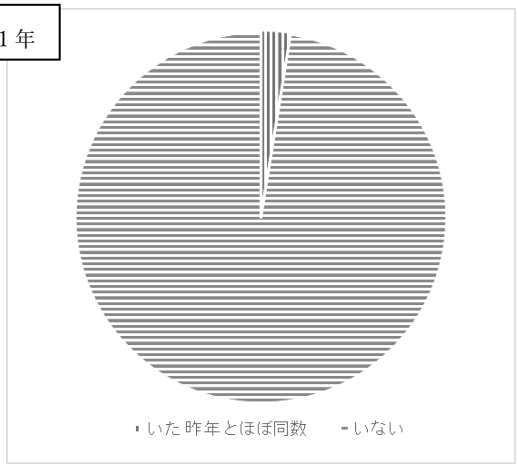


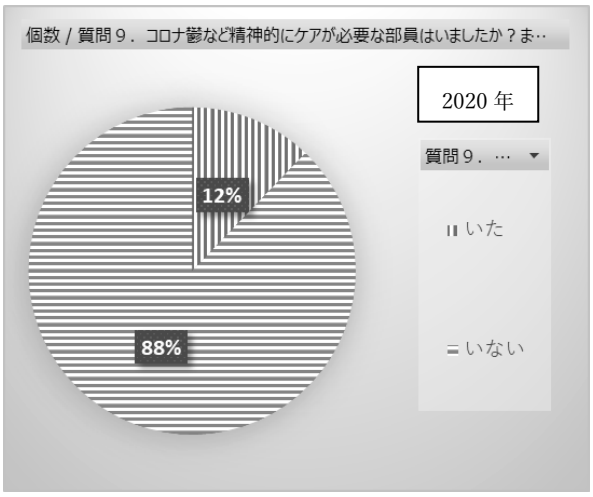


「全く勧誘できていない」が２割あるにもかかわらず、新入部員数が「例年より少ない」という回答はなかった。コロナ禍の逆境であってもやる気のある生徒が入っていることを示し、部活動の本来あるべき姿である。

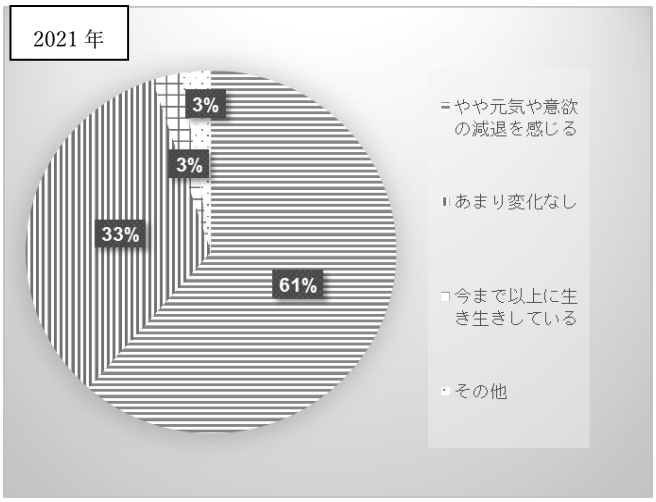
質問１４　コロナ鬱など精神的にケアが必要な部員はいましたか？

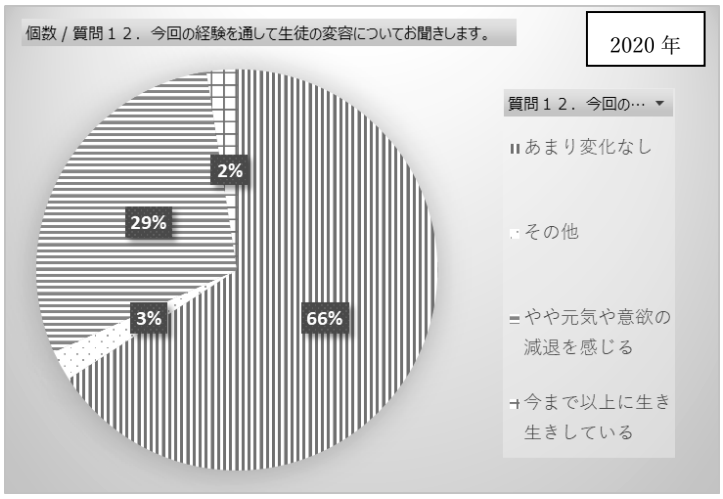
2021 年





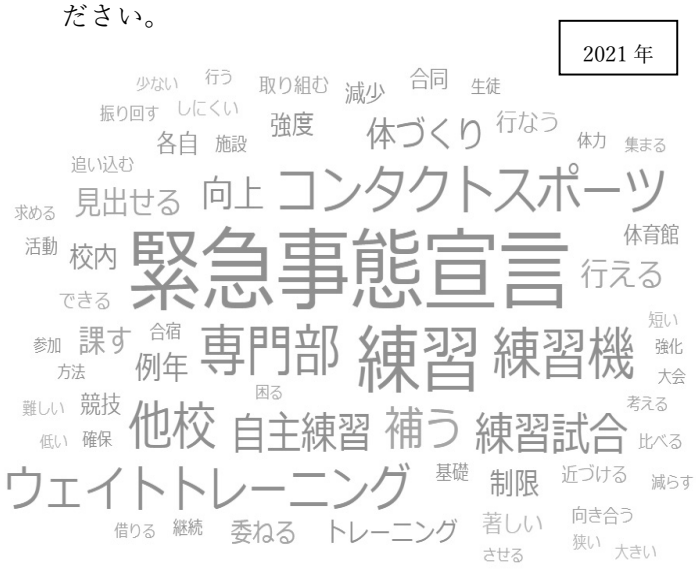
特徴　ケアが必要な部員は減り、限りなくいなくなった。

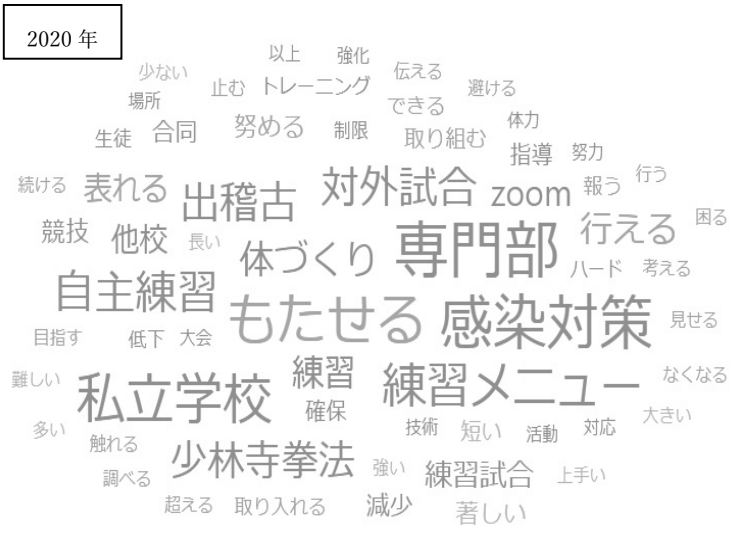




特徴１　「やや元気や意欲の減退を感じる」が倍に増え、変化なしが半分になった。2020 年より部活動頻度が増えているのに不思議な結果である。

質問１７．コロナ禍での「競技力向上：強化」について困っていること、それに対応した方法などを教えてください。



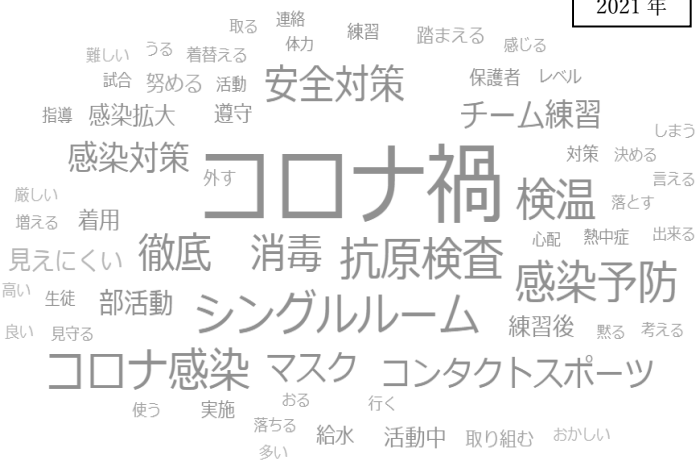


特徴　2021 年は部活動がほぼ緊急事態宣言中であったため強化するにも通常の他校との練習試合などができないことが大きく出ている。

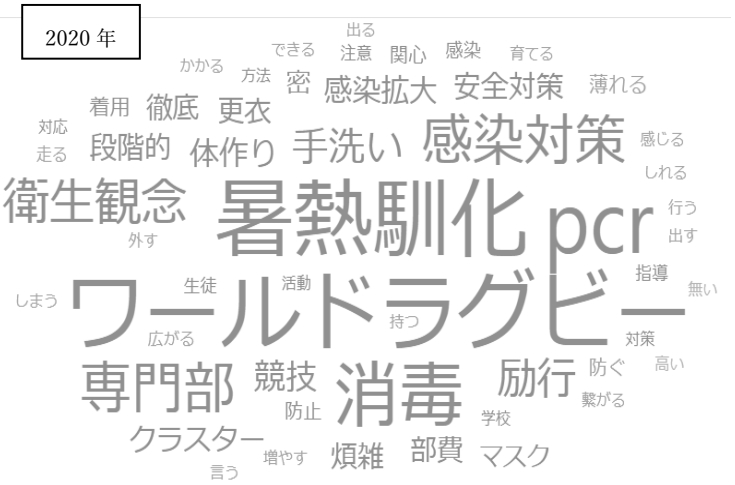
練習メニューを考え、いかに練習時間を確保するか、その上で感染対策をいかに取るかが大事であることを示している。

質問１８．コロナ禍での「健康と安全」について困っていること、それに対応した方法などを教えてください。

2021 年



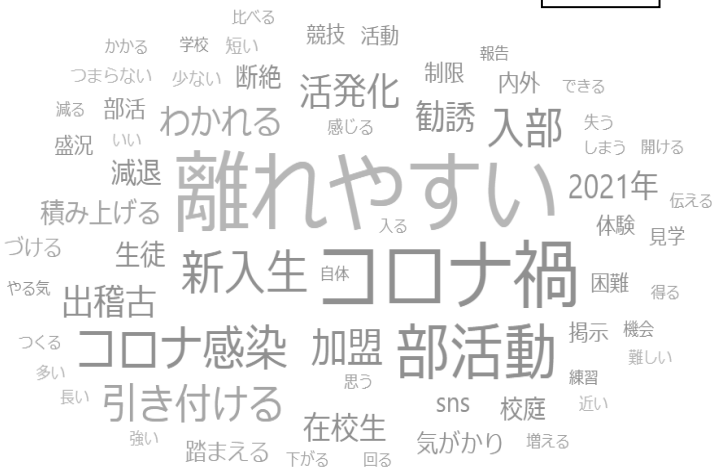
2020 年



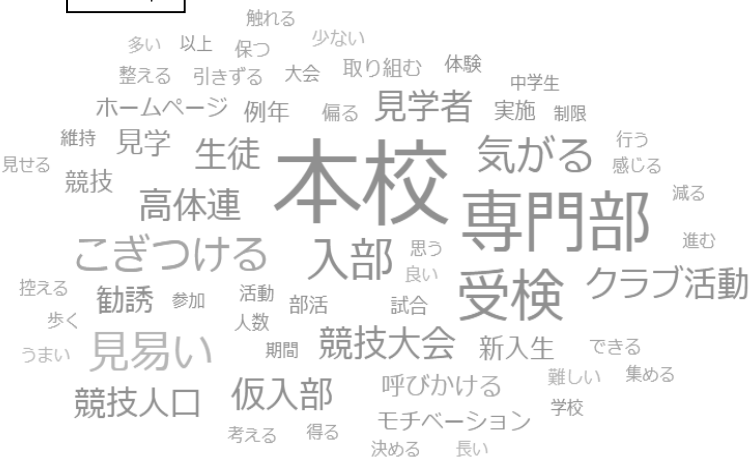
特徴　2021 年は緊急事態宣言中の部活動であるため、部活動を継続するための具体的な行動が大きく出ている。検温・消毒・感染予防・マスクはもちろん大会ではシングルルームなど様々な制約で行われたことが顕著に出ている。

質問１９．コロナ禍での「部活動の普及」について困っていること、それに対応した方法などを教えてください。

2021 年



2020 年



特徴　部活動が通常通りできないことから部活離れがあったことを表している。

５．まとめ

＜活動実態と対策＞

・活動の休止を余儀なくされた 2020 年から 1 年経過し、社会の安全安心を優先しつつ、活動するための対策や工夫がなされていることが明らかとなった。感染拡大対策への慎重な取り組みに苦労していることも分かった。

＜生徒対応＞

・3 年生が緊急事態宣言中でも例年のような集大成を行えたことは改善方向の回答に繋がっている。

・新入生の勧誘について、入部人数が減ることもなかったのは 2020 年の経験を経て勧誘方法に工夫が見られたからといえる。

・コロナ禍により精神的にケアが必要とされる生徒は減少した。

＜課題＞

・制限された社会状況に対して、ICT の活用した部活動の増加がみられ、コミュニケーションの場面が増えていた。スキルの獲得と活用は今後さらに求められるといえる。そのため、教員研修の必要性は高まり、研修のための時間の確保は課題となる。

・部活動の運営において、「引継ぎ」は課題といえる。教員の支援を必要とすることが予想され、その関わりは重要であると考える。

・新入生へのアプローチと工夫で、入部に意欲をみせる部員は存在し、部員数の確保はなされている。しかしながら、「部活動離れ」がささやかれており、部活動の活動内容に一層工夫は必要である。このような状況下での、年間を通した部活動を継続させるための取り組みは、教員の支援を必要とするところがかなりあると考える。

・コロナ禍では、対外試合の制限がありチーム強化に影響したことが予想される。今後、チーム内での強化に対する工夫は課題であると考える。

以　上

東京都高等学校体育連盟「研究部」規約

第一章　名称及び事務局

第１条　本研究部（以下「本部」という）は、東京都高等学校体育連盟研究部と称する。
第２条　本部の事務局は、会長指定の高等学校におく。

第二章　目　的

第３条　本部は、東京都高等学校体育連盟が教育活動の一環として実施する体育・スポーツ活動に関する調査並びに研究を行い、その発展に寄与することを目的とする。

第三章　事　業

第４条　本部は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
１）競技力向上、普及振興、安全対策に関する調査研究
２）研究会並びに講習会の開催
３）その他本部の目的達成に必要な事項

第四章　組織及び委員

第５条　本部は、各競技専門部及び定通制部から選出された委員を以て組織する。
委員の任期は、２カ年とし、再任は妨げない。

第五章　役　員

第６条　本部に下記の役員をおく。
１）部　長　１名
２）副　部　長　２名　（１名は委員長及び本連盟の常任理事を兼ねる）
３）常任委員　１０名
４）監　事　２名
第７条　役員は、委員会において選出する。
第８条　役員の任務
１）部　長　部長は、本部を代表し、会務を統括する。
２）副部長　副部長は、部長を補佐し、部長事故ある時はその職務を代行する。
委員長を兼ねる副部長は、会務を執行する。
３）常任委員　常任委員は、会務の企画、運営にあたる。
４）監　事　監事は、本部の会計を監査する。
第９条　役員の任期は、２カ年とし、再任は妨げない。補充によって就任した場合は、前任者の残任期間とする。

第六章　会　議

第 10 条　委員会は、委員を以て構成し、必要事項を審議決定する。
第 11 条　常任委員会は、役員を以て構成する。常任委員会は、部長が招集し、必要事項を審議する。なお、緊急事項が生じた場合は、常任委員会で審議決定し執行する。
執行内容については、委員会に報告しなければならない。

第七章　会　計

第 12 条　本部の経費は、本連盟の一般会計・研究部費、その他を以てこれにあてる。
第 13 条　本部の会計は、毎年４月１日に始まり、翌年３月 31 日に終わる。

第八章　附　則

第 14 条　本規約は、本連盟常任理事会の議決を得て変更することができる。
第 15 条　本規約は、平成１３年１１月１６日より施行する。
（経過）　1．平成１９年　４月　２６日　第一次改定
２．平成２１年　４月　１８日　第二次改定

役員の選出に関する細則

１)部長は、都内高等学校長より選出する。
２)副部長２名（１名は委員長及び常任理事を兼ねる）は、委員の互選により選出する。
３)常任委員は、委員の互選により１０名を選出する。
（各分科会代表３名、団体種目系３名、個人種目系２名、武道系２名）
４)委員は、各専門部・定通制部の互選とする。（各専門部より若干名、定通制部より１名）
５)監事は、委員の互選とする。

東京都高等学校体育連盟

＜研究部＞　　組織と名簿　　**令和3年度**　　***2021年***

役職名	氏　名	専門部	属系	勤務校	〒	所在地	電　話	ＦＡＸ	研究部役職	
部長	高野学	バスケットボール	個人	都立杉並工業	166－0016	杉並区成田西4-15-15	03-3391-6530	03-3398-3767	都高体連副会長	保健体育
副部長（委員長）	田中康之	サッカー	団体	都立立川	190-0022	立川市錦町2-13-5	042-524-8195	042-527-9906	都高体連常任理事	保健体育
副部長（副委員長）	鞠子智秋	サッカー	団体	都立清瀬	204-0022	清瀬市松山3-1-56	042-492-3500	042-491-9491		保健体育
常任委員	阿部一臣	ソフトテニス女子	個人	都立高島	175-0082	板橋区高島平3-7-1	03-3938-3125	03-338-4057	第１分科会チーフ	英語
〃	堀越和彦	自転車競技	個人	日本学園	156-0043	世田谷区松原2-7-34	03-3322-6331	03-3327-8987	第2分科会チーフ	英語
〃	柳澤左門	ボート	団体	都立日本橋	131-0041	墨田区八広1-28-21	03-3617-1811	03-3612-5396	第3分科会チーフ	保健体育
〃	森政憲	サッカー	団体	桐朋	186-0004	国立市中3－1－10	042-577-2171	042-574-9898		保健体育
〃	奥　正克	ハンドボール	団体	都立小金井北	184-0003	小金井市緑町4-1-1	042-385-2611	042-382-9522		地歴
〃	青木茉奈美	バスケットボール女子	団体	昭和第一学園	190-0003	立川市栄町2-45-8	042-536-1611	042-537-6880		保健体育
〃	征矢範子	陸上競技男子	個人	筑波大学附属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-7176	03-3943-0848		保健体育
〃	秋月　隼	弓道	武道	都立美原	143-0012	大田区大森東1-33-1	03-3764-3883	03-3764-3854		理科(化学)
〃	塩田伸隆	空手道	武道	都立府中東	183-0012	府中市押立町4-21	042-365-7611	042-369-8506		理科(化学)
〃	眞鍋　健治	少林寺拳法	武道	桜丘中学・高等学校	114-8554	北区滝野川1-51-12	03-3910-6161	03-3949-0677		保健体育
会計	新井理仁	ソフトボール	団体	都立第一商業	150-0035	渋谷区鉢山町8－1	03-3463-2606	03-3463-2050		英語
監事	松里　亮	軟式野球	団体	東洋大学京北	112-8607	文京区白山2-36-5	03-3816-6213	03-3816-6217		国語
〃	藤岡純也	卓球女子	個人	都立東村山西	189-0024	東村山市富士見町5－4－41	042-395-9121	042-392-7276		国語

令和3年度　　***2021年***

	氏　名	専門部	属系	勤務校	〒	所在地	電　話	ＦＡＸ	前年度役職	教　科
（競技力向上）第一分科会	征矢範子	陸上競技男子	個人	筑波大学附属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-7176	03-3943-0848	常任委員	保健体育
	曽根原龍大	陸上競技男子	個人	日本大学豊山	112-0012	文京区大塚5-40-10	03-3943-2161	03-3943-1991		数学
	黒須崇仁	陸上競技女子	個人	江戸川女子	133-8552	江戸川区東小岩5-22-1	03-3659-1241	03-3659-4994		保健体育
	杉浦翔太	ボクシング	武道	都立隅田工業	135-0004	江東区森下5-１-7	03-3631-4928	03-3846-6683		工業(電気)
	橋本美月	バレーボール女子	団体	都立桜町	158-0097	世田谷区用賀2-4-1	03-3700-4330	03-3700-9141		保健体育
	阿部一臣	ソフトテニス女子	個人	都立高島	175-0082	板橋区高島平3-7-1	03-3938-3125	03-338-4057	第１分科会チーフ	英語
	佐藤大輔	体操男子	個人	青峰学園特別支援学校	198-0014	東京都青梅市大門3-12	0428-32-3811	0428-32-3841		保健体育
	新井理仁	ソフトボール	団体	都立第一商業	150-0035	渋谷区鉢山町8－1	03-3463-2606	03-3463-2050	会計	英語
	奥　正克	ハンドボール	団体	都立多摩科学技術	184-0003	小金井市本町6-8-9	042-381-4164	042-381-4169	常任委員	地歴
	田中康之	サッカー	団体	都立立川	190-0022	立川市錦町2-13-5	042-524-8195	042-527-9906	委員長	保健体育
	松里　亮	軟式野球	団体	東洋大学京北	112-8607	文京区白山2-36-5	03-3816-6213	03-3816-6217		国語
13名	高部兼太朗	ウェイトリフティング	個人	日大鶴ヶ丘	168-0063	杉並区和泉2-26-12	03-3322-7521	03-3325-0203		保健体育
	森政憲	サッカー	団体	桐朋	186-0004	国立市中3－1－10	042-577-2171	042-574-9898		保健体育

	氏　名	専門部	属系	勤務校	〒	所在地	電　話	ＦＡＸ		教　科
（健康と安全）安全第二分科会	小林　岳	ホッケー	団体	早稲田高等学院	177-0044	練馬区上石神井3-31-1	03-5991-4151	03-3928-4110		地歴公民科
	佐藤貴文	水泳	個人	都立三田	108-0073	港区三田1-4-46	03-3453-1991	03-3453-2899		保健体育
	眞鍋健治	少林寺拳法	武道	桜丘中高等学校	114-8554	北区滝野川1-51-12	03-3910-6161	03-3949-0677	常任委員	保健体育
	今井　純	男子バスケットボール	団体	大東文化大学第一	175-8571	板橋区高島平１－９－１	03-5399-7890	03-5399-7891		地歴公民科
	糸園容子	アーチェリー	個人	都立第四商業	176-0021	練馬区貫井３-４５-１９	03-3990-4221	03-3926-7040		英語
	堀越和彦	自転車競技	個人	日本学園	156-0043	世田谷区松原2-7-34	03-3322-6331	03-3327-8987	第2分科会チーフ	英語
	坂入　崇	卓球男子	個人	都立葛西南	134-8555	江戸川区南葛西1-11-1	03-3687-4491	03-3687-4453		公民科
	藤岡純也	卓球女子	個人	都立東村山西	189-0024	東村山市富士見町5－4－41	042-395-9121	042-392-7276	監事	国語
	高田丈裕	レスリング	武道	日本工業大学駒場	153-8508	目黒区駒場1-35-32	03-3467-2130	03-3467-2165		保健体育
	上村　謙	フェンシング	武道	本郷	170-0003	豊島区駒込4-11-1	03-3917-1456	03-3917-0007		国語
	秋月　隼	弓道	武道	都立美原	143-0012	大田区大森東1-33-1	03-3764-3883	03-3764-3854	常任委員	理科(化学)
	塩田伸隆	空手道	武道	都立府中東	183-0012	府中市押立町4-21	042-365-7611	042-369-8506	常任委員	理科(化学)
14名	六車健吉	ライフル射撃	武道	明治大学付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		芸術（美術）
	青木茉奈美	バスケットボール女子	団体	昭和第一学園	190-0003	立川市栄町2-45-8	042-536-1611	042-537-6880		保健体育

	氏　名	専門部	属系	勤務校	〒	所在地	電　話	ＦＡＸ		教　科
（部活動の活性化）普及第三分科会	中島弘貴	テニス	個人	富士見	176-0023	練馬区中村北4-8-26	03-3999-2136	03-3999-2129		社会(公民)
	平野真央	体操女子	個人	大妻女子	102-8357	千代田区三番町12	03-5275-6057	03-5275-6093		保健体育
	稲井祥紀	ソフトテニス男子	個人	都立豊多摩	166-0016	杉並区成田西2-6-18	03-3393-1331	03-3398-3746		数学
	北畠裕章	バレーボール男子	団体	駒場東邦	154-0001	世田谷区池尻4-5-1	03-3466-8221	03-3466-8225		保健体育
	関根弘和	スケート	個人	早稲田実業	185-8505	国分寺市本町1-2-1	042-300-2121	042-300-1123		情報
	鞠子智秋	サッカー	団体	都立清瀬	204-0022	清瀬市松山3-1-56	042-492-3500	042-491-9491	副委員長	保健体育
	中塚義実	サッカー	団体	筑波大学附属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-7176	03-3943-0848		保健体育
	中村豪介	アメリカンフットボール	団体	麻布	106-0046	港区元麻布2-3-29	03-3446-6541	03-3444-2337		保健体育
	君塚善宏	柔道	武道	巣鴨	170-0012	豊島区上池袋1-21-1	03-3918-5311	03-3918-5305		保健体育
	松坂輝夫	剣道	武道	都立墨田川	131-0032	墨田区東向島3-34-14	03-3611-2125	03-3612-6123		英語
	児玉朋隼	相撲	武道	明治大学付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		英語
	田中鶏郎	なぎなた	武道	文化学園大学杉並	166-0004	杉並区阿佐谷南3-48-16	03-3392-6636	03-3391-8272		数学
	柳澤左門	ボート	団体	都立日本橋	131-0041	墨田区八広1-28-21	03-3617-1811	03-3612-5396	第3分科会チーフ	国語
	櫻井幹久	登山	団体	安田学園	130-8615	墨田区横網2-2-25	03-3624-2666	03-3624-2668		地歴
	渡部絹江	チアリーディング	団体	都立文京	170-0001	豊島区西巣鴨１－１－５	03-3910-8231	03-3915-9886		保健体育
19名	津田弘毅	バドミントン	個人	都立調布南	182-0025	東京都調布市多摩川6-2-1	042-483-0765	042-483-7091		理科
	滝田裕幸	スキー	個人	麻布	106-0046	港区元麻布2-3-29	03-3446-6541	03-3444-2337		英語
	田草川直希	ラグビー	団体	都立墨田工業	135-0004	江東区森下5-1-7	03-3631-4928	03-3846-6638		数学
	工藤慶之	少林寺拳法	武道	帝京	173-8555	板橋区稲荷台27-1	03-3963-4711	03-3963-2430		数学

令和4年度　東京都高等学校体育連盟 研究部 調査用紙

専門部名

◎令和3年度・令和4年度の2年任期を原則とし、任期の継続をお願いします。
なお、研究部員は、専門部から複数名出していただくことも可能です。
※印欄の内容は、委員名簿には掲載しませんが、連絡に使用させていただきたいので、是非ご記入下さい。
※E－mail での連絡体制にご協力ください。

研究部員	よみがな		携帯電話番号 ※		
	氏　名		メールアドレス ※		
	勤務先学校名		E－mail アドレス ※		
	勤務先〒		勤務先住所		（担当教科）
	勤務先電話番号		勤務先Fax		
	所属希望分科会	第一希望に◎ 第二希望に○	・第1分科会(競技力向上)　・第2分科会(健康安全)　・第3分科会(部活動活性化)		
研究活動	都高体連研究活動（研究発表など）に協力いただいた専門部		ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ、空手道、剣道、柔道、ﾎﾞｸｼﾝｸﾞ、少林寺拳法、弓道、相撲、サッカー、男子ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ、男子ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ、女子ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ、ラグビー、アメリカンﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ、ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ、、ﾊﾝﾄﾞﾎﾞｰﾙ、ホッケー　、軟式野球テニス、アーチェリー、陸上競技、水泳、ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ、スケート、体操男子、ボート		
	令和4年度以降に、ご協力をお願いしたい専門部		バレーボール女子、スキー、ウェイトリフティング、自転車競技、卓球女子、レスリング、ライフル射撃、体操女子、ソフトテニス男子ソフトテニス女子、なぎなた、登山		
	ご協力（専門部として研究発表）の予定		**令和4年度　令和5年度　令和6年度　※○印を**		

専門部報告
（競技力向上の取組み）
（健康安全面での取組み）
（部活動活性化＝普及活動での取組み）
（専門部として取り組んでいる研究）

提出期限 令和4年 4月5日（火）

令和4年度 東京都高体連研究部委員会 開催予定日　**令和4年 4月19日（火）**

提出先　研究部委員　森 政憲　桐朋高校　TEL 042-577-2171　FAX 042-574-9898
E－mail　ms.mori@toho.ed.jp

◇この調査内容は、原則、E-mailで、ご報告願います。
※この書式をデータとして必要な場合、東京都高体連ホームページからダウンロードできます。
または、森宛にメールでご連絡下さい。添付ファイルとしてお送りします。